

山羊髯編輯長

夢野久作

青空文庫

女箱師

一

「玄洋日報社」と筆太に書いた、真黒けな松板の看板を発見した吾輩はガツカリしてしまった。コンナ汚穢きたない新聞社に俺は這入はいるのかと思って……。

古腐ったバラック式二階建に塗った青い安ペンキがボロボロに剥はげチョロケている。四つしかない二階の窓硝子ガラスが新聞紙の膏藥こうやくだらけだ。右手に在る一間幅ぐらいの開あけっ放しの入口が発送口だろう。紙屑だの縄切れだのが一パイに散らかっている。

その前に掲示してある八頁ページの新聞を見ただけで吾輩は読む気がしなくなった。旧五号の薄汚れた潰れ活字で、日清戦争頃の号外でも見るようだ。コンナ新聞が、まだ日本に残つ

ているのかと思われる位だ。

しかし吾輩自身の姿を振り返ってみるとアンマリ大きな事も云えなかった。

東京一、日本一の東洋時報社で、給仕からタタキ上げた腕ツコキの新聞記者といえ、
チヨット立派に聞こえるかも知れないが、それがアンマリ腕ツコキ過ぎたのだろう。新聞
記者としてアラン限りの悪い事を為^{しつく}尽^{あげく}した揚句、大正十一年の下半期に到って、東京中の
新聞社からボイコットを喰^くった上に、警察という警察、下宿という下宿からお構^{こうむ}いを蒙^も
て逃げて来たんだから大したもんだ。モウ十一月というのに紺サージの合服と、汽車の中
で拾^{もみじぎ}った紅葉材^{もみじぎ}のステッキ一本フラットというんだから、蟻^{がまぐち}口の中味は説明に及ぶまい。
タツタ今博多駅で赤い切符を駅員に渡したトタンに木から落ちた猿みたいな悲哀を感じて
来た吾輩だ。三流か四流か知らないが、こんなボロ新聞社にでも押し込まなければ、押し
込みどころのない身体^{からだ}だ。

「ここを押……」と書いた白紙の下半分が「……して下さい」と一^{いっしょ}所に切れ落ちている
扉^{ドア}を押すと、イキナリ販売兼、会計部らしい広間に這入った。しかし人間は一人も居ない。
マン中の鉄火鉢の前に椅子を引き寄せた小使らしい禿^{はげあたま}頭^{あたま}が、長閑^{のどか}に煙草^{くゆ}を燻^{くゆ}らしてい
るだけだ。

「きようはお休みなんですか」

と少々面喰った顔で吾輩が尋ねると、
はげあたま 禿頭の小使が悠々となたまめぎせる 鈍豆煙管をハタイた。

「イイエ。販売部は正午切りおひるであすが……何か用であすな……」

と云い云い如何にも横柄おうへいな態度で、自分の背後の古ぼけたボンボン時計を見た。二時半をすこし廻わっている。少々心細くなつて来た。

「アノ編輯長は居られるでしょうか」

「編輯長チウト……津守つもりさんだすな」

「ええ。そうです。そのツモリ先生に一寸ちよつとお眼にかかりたいんですが……」

「何の用ですか」

「新聞記事の事です」

「……………」

小使は中々腰を上げない。苦り切った表情で又も一服詰めて悠々と鉄火鉢の中に突込んだ。吾輩は心細いのを通り越して腹が立つて来た。コンナケチな新聞社にコンナ図々しい小使が居る。まさか社長が化けているのじゃあるまいに……と思ひながら……。

するとそのうちに小使がヤットコサと腰を上げた。煙管を腹がけどんぶりの井に落し込みながら、

悠々と俺の前に立塞がつて、真黒な右手をニユーと差し出した。俺は面喰つて後退りした。
た。

「何ですか……」

「名刺をば……出しなさい」

吾輩は街頭強盗ホールドアップに出会つた恰好で、恐る恐る名刺を渡した。「中央毎夕新聞編輯部羽束友一」と印刷した最後の一枚を……。

小使は、この名刺をギューと握り込んだまま、吾輩の直ぐ横に在る真暗い、泥だらけの階段を上つて行つた。その一足毎に、そこいら中がギシリギシリと鳴つて、頭の上の天井の隙間からポロポロとホコリが落ちて来たのにはイヨイヨ驚いた。

たまらない不安な気持で待つているうちに、階段の上から大きな声がした。

「コチラへ上つて来なさつせえ」

どこの階段でも一気に駆け上るのが癖になつてゐる吾輩もこの時ばかりは気が引けた。匍はい上るような恰好で、杖を突張り突張り段々を踏んだ。スツカリ毒気を抜かれていたばかりじやない。古い板階段の一つ一つが、磨り残つてビヨンビヨンしている上に、下向きに反そり返つてゐるので、ウツカリすると迂すべり落ちそうな気がしたからだ。今朝早く、

汽車弁当^{べん}を一つ喰った切り、何も腹に入れていなかったせいかも知れないが……。

ヤツトの思いで上に登り付くと、小使が仁王立ちになつて待つていた。それでも最上級の敬語であつたろう……、

「ココへ這入つて待つて居^おなさい。今津守さんが見えますけにナ……」

と云うと、又もドシンドシンと雷鳴^{とどろ}を轟かしながら暗い階段を降りて行つた。

……又、心細くなりそうだな……と思ひ思ひ出来るだけ心細くならないように……イヤ……出来るだけ威勢よく見せかけるために部屋の中を見まわした。

多分、応接室のつもりだろう。穴だらけの青羅紗^{ラシヤ}を掛けた丸卓^{テーブル}子の左右に、歪^{ゆが}んだ椅子がタツタ二つ置いてある。右手の新聞原紙^{ゲラ}で貼り詰めた壁の上に「南船北馬……朴泳^{ぼくえい}孝^{こう}」と書いた大額^{すず}が煤^{すす}け返つてゐる。それに向い合^{あひ}に明治十二年発行の「曙新聞^{あけぼの}」の四頁^{ページ}が、硝子^{ガラス}枠に入れて掛けてあるのはチョット珍らしかった。泥だらけの床の片隅に、古い銅版がガチャガチャと山積してあるのは、地金屋^{じかねや}にでも売るつもりであらうか。……そんなものを見まわしているうちに思ひがけなく腹がグーグーと鳴り出してタマラない空腹を感じ出した。そこで吾輩は意気地なく杖を突張つて我慢しようとしてゐるところへ、うしろの方に人の気はいがしたので、ビックリして振り向いてみると、すぐに奇妙な恰好を

した小男と顔を合わせた。

背の高さは五尺足らず……ちよつと一寸坊といった感じである。年は四十と七十の間ぐらいであろうか。色が真黒で、糸のように痩せこけているので見当が付きにくい。白髪頭を五分刈^{ぶがり}にして分厚い近眼鏡をかけて、顎の下に黄色い細長い山羊髯^{やぎひげ}をチョッピリと生やしている。それが灰色の郡山の羽織袴に、白足袋^{たび}に竹の雪隠草履^{せつちんぞうり}という、大道易者ソツクリの扮装で、吾輩の直ぐ背後^{うしろ}に突立っていたんだからギョツとさせられた。今の腹の音を聞かれたんじゃないかと思つて……。

その山羊髯の一寸坊爺^{じい}は、身体^{からだ}に釣合つた蚊の泣くような声を出した。

「お待たせしました。わたし……津守です……」

と云い云い傍^{そば}の椅子を指したので、イキナリ腰をかけようとすると忽ち^{たちま}引つくり返りそうになったから、慌てて両足を突張つた。椅子の足がみんなグラグラになっているのだ。吾輩は下ツ腹を凹^{へこ}ましてステッキを突張つた。

山羊髯^{おやじ}の爺は、その吾輩の真正面に、丸卓^{テーブル}子を隔ててチョコナンと尻^{おろ}を卸した。向^{むか}側の椅子も相当歪んでいるようであるが、引つくり返らないのは身体^{からだ}が軽いせいである。その貧弱な事、踏台にハタキを立てかけた位にしか見えない。コンナ奴の下になつて

働らくのか……オヤオヤと思いながらも吾輩は、絶体絶命の雄弁を揮^{ふる}つて採用方を願ひ出した。今までの事を残らずブチ撒^まけてしまった。

「……だからモウすっかり屁古^{へこた}垂れちゃったんです。編輯の給仕から、速記者から、社会部の外交まで通過して来るうちに、悪い事のアラン限りを遣り尽して来たんです。そうしてモウすっかり前非後悔しちゃったんです。これから一つ地道^{じみち}になって働らいてみようと思ひましてね……どんなボロ新聞社でもいいから……イヤナニその……何です……僕を買ってくれる人の下ならドンナ仕事でもいい……月給なんかイクラでもいい……やってみようと思つてお訪ねした訳なんですが……東京中の新聞社と警察と下宿屋連中にお構いを喰つちやつたんで行く処が無いんです……今年二十四なんですが……いかがでしょうか……」

そう云う吾輩の顔を山羊髯はマジリマジリと見ていた。吾輩が臍^{はらわた}のドン底の屁^へツ滓^{かす}の出るところまで饒舌^{しゃべ}り尽してしまつても、わかつたのか、わからないのかマルツキリ見当が付かない。朝鮮渡来の木像じみた表情で、眼をシヨボシヨボさせながら、片手で吾輩の名刺をヒネクリまわしているキリである。

吾輩もその顔を見詰めて眼をシヨボシヨボさせた。真似をしたんじやない。気味が悪くなつて来たからだ。同時に中風病^{ちゆうふうや}みみたような椅子の上に、中腰になつてゐる吾輩の両

脚が痺れしびそうになつて来た。汚れた名刺を取返して、諦らめて帰ろうかと思ひ、尻をモジモジさせていると、又も下ツ腹が大きな音を立ててグーグーと鳴った。今度こそ慥たしかに聞こえたに違ひない。

吾輩は心細いのを通越して涙ぐましくなつた。見得も榮はえもなくステッキの前にうなだれてしまつた。この間、酔つ払つた勢いでナグリ倒した救世軍士官の顔が、眼の前にチラ付いて来た。

「……ヒツ……ヒツ……ヒ……」

山羊髯が突然に妙な声を出したので、吾輩はビックリして顔を上げた。まるで山羊のよな声だと思ひながら……その時に山羊髯はヤツと咽喉のどに絡まつた痰たんを嚥のみ下して、蚊の啼くような声を切れ切れに出した。

「……まあ……何か……記事になりそうな話を……一つ……取つて来て御覧なさい……ヒツ……ヒツ……ヒヒ……ゴロゴロゴロ……」

と云ううちに又一つ痰たんを嚥のみ下して眼をシヨボシヨボさした。生きている甲斐も御座いけません……と云いたいような表情をしたと思うと、そのままスウスウと煙のように立上つて廊下に出た。廊下の向うの、板壁の向うの編輯室らしい方向へ消えて行つた。右足が曲

っているらしく非道いビツコを引きながら……。

吾輩は呆氣あつけに取りられてその背後うしろすがたを見送った。頭の芯しんがジーンと鳴り出したような気がした。

「……山羊髯のオジサン。ちよつと待つて下さい。実はその現在一文もお金が無いのです。僕を採用するならするでイクラカ前貸しして頂きたいのですが」

と呼びかける勇氣も無くしてしまつたまま杖に縋すがつてヒヨロヒヨロと立ち上つた。

コンナ編輯長に出会つた事は今までに一度も無い。

コンナ屁ツポコ新聞社に跣かかまつているヨボヨボの編輯長が、吾輩のモノスゴイ、スバラシイ性格や技能をタツタ一眼で見貫みぬき得る筈は絶対に無い訳なのに、何一つ尋ねるでもなければ、社としての希望を述べるでもない。おまけに採用するつもりか、そうでないのかテンデ見当の付かない事をタツタ一言、云いつ放しただけで、ビツコ引き引き引上げるなんて、無責任なのか、乱暴なのか、礼儀を知らないのか、それとも吾輩の事を同業者仲間誰からか聞いて知っているのか……又は新聞記者を鉛筆担かづいだ木ツ葉職人同然に心得ているのか……何が何だか見当が付かない……とに角にも編輯長をつとめている以上キチガイじゃないと思うが……。

そんな事を考えてボンヤリ突立っているうちに編輯室の方向から電話にかかっている速記者らしい声が聞こえて来た。

「……何だア……武雄から急報……何だア……犯人は何だア……税関……税関がどうしたんだア……ナニイ……マージャン……マアジャンたあ何だあ……朝の雀と書くウ……チューチューという雀かア……何だアサ違いだア……着物の麻だア……わかったわかった。馬鹿にするナア」

その声を聞いているうちに俺はブルブルと胴ぶるいがして来た。

「ヨシッ……何でも構わない。一つビツクリするような記事を取って来てやろう。……こうなれば絶体絶命だ。どうするか見やがれ。……肝を潰すな山羊髯おやじ」

と決心するとモウ一つブルブルと胴震いがした。持って生まれた新聞記者本能が、ツイ今しがたの電話の声で眼覚め初めたのだ。そうして腹の減ったのも忘れて一気に応接間の暗い階段を駆け降りた。

当てどもない福岡の町のマン中へ飛び出した。生れ変ったような澆刺とした気持で……。

生れて初めて来た……知っている者が一人も居ない……西も東もわからない田舎の町でイキナリ新聞記事を探して来いと云われたら大抵の記者が屁古へこた垂れるだろう。

ところが吾輩は屁古垂れなかった。

ポケットに残っていた五十錢玉を、東中洲の盛り場で投出して、飯付めしつき十五錢の鋤焼すきやきを二人前詰込んだ吾輩は、悠々とステッキを振り振り停車場へ引返した。三等待合室へ張込んで、クチャクチャになった朝日の袋の中からモウ一本引出して美味うまい美味い煙を吸った。

……實際自信があつたのだ。どんな小さな都会でも新聞記事が無ければ停車場に行くに限る。アトは眼と頭だ。それから足だ。

煙草吸い吸い構内を一周ひとめぐりして見ると、新聞記者らしい者の影が一つも見えない。町が小さいのか、新聞社が貧弱なのか。停車場専門の記者が居ないと見える。モウ四時半の上り下り急行列車が着く間際なのに……と思ひながら一二等の改札口に来て左右を見まわすと……居た……。

但、新聞記者じゃない。茶の中折に黒マントの日に焼けた男がタツタ一人駅長室の前に

立っている。その引締まった横頬と、精悍^{せいかん}なうしろ姿はドウ見ても刑事だ。ことに依ると毎日張込んでいる拘摸^{すり}専門の刑事かも知れないと思ったが、それならタツタ今改札し初めた、改札口に気を付ける筈なのに、そんな気ぶりも無い。心持ち前屈^{まえこ}みになって、古い駒下駄の泥をステッキの先で落している。たしかに大物を張込んでいるらしい態度だ。その態度を片目で注意しやすいプラットフォームに突立っている群集の姿を一人一人見まわしているうちに上り列車が着いて、こっちのプラットフォーム一パイに横たわった。：と思うとその刑事は、さり気ない風情^{ふぜい}で、郵便車の前に佇^{たたず}みながら、改札口の方角を監視し始めた。四十恰好の眼の鋭いチャップリン^{ひげ}髭を生やした男だ。

そのうちに下りの急行も着いたらしく改札口が次第にコミ合い初めた。駅員が三人で三^み処^{ところ}の改札口を守っているが仲々捌^{さば}き切れない。バスケットを差上げる田舎者。金切声を出して駈^{かけ}け出す令嬢。モシモシと呼び止める駅員。オーイオーイと帽子を振る学生など。然し吾輩はソナなものには眼もくれないで刑事の眼付きを一心に注意していた。煙たそうに口付^{くちつき}を吸いながら改札口を見守っているその眼付きを……。

するとその口付が半分も立たない中にポイと刑事の口から吹き棄てられた。同時に刑事がノツソリと郵便車の前を離れて、群集に混っているモウ一人の刑事らしい男とうなずき

合った。群集の中のどれか一人を眼で知らせ合いながら……どこからか跟けて来た犯人をリレーしている気はいである。

吾輩はすぐに一二等改札口から引返して出口に向った。

見るとチャップリン髭の刑事は大急ぎで駅前の青電車（東邦電力経営）の方へステッキを振って行く。その五六間先に、派手なハンチングを冠^{かぶ}つて、荒い格子縞^{つりがね}の釣鐘マントを着た男が、やはり小急ぎしながら電車に乗りに行く恰好が眼に付いた。これが新聞記者特有の第六感というものであつたろうか。それともその釣鐘マントが急ぐ速度と刑事が跟^つけて行く速度が似通っているせいであつたろうか。その釣鐘マントの影に重たそうな風呂敷包を携^さげているのが見えた。結び目の隙間^{すきま}から羊歯^{しだ}の葉がハミ出しているとところを見ると、果物の籠か何からしい。

吾輩は足を宙に飛ばした。満員になつて動きかけているその電車の前の方から飛び乗った。うしろの方のステップには刑事がブラ下がつているから遠慮した訳だ。「モット中へ這入って下さい」と運転手から怒鳴られるまにまに吾輩はグングンと中の方へ身体^{からだ}を押し込んだ。マン中の釣革にブラ下つている縞^{しま}の釣鐘マントの横に身体を押し付けながら、素

早くマントの裾をマクリ上げて、風呂敷包みの横の隙間から気付かれないように手を突込んでみた。

羊齒の葉が指の先に触った。それから柿……と思ううちに電車が駅前の交叉点のカーブを曲ったので車内が一齐にヨロヨロとよろめいた。その拍子に思わずグツと手を突込んでみると、固い、四角い、新聞包みらしい箱に触った。その箱の中央に何かしら金具らしいガタガタするもの……麻雀^{マーじゃん}？……

……何をするんです……

といわんばかりに若い男が眼を剥いて吾輩を睨み付けた。青白い、鼻の高い、眉の一直線な、痩せこけた男だ。どこかで見たような顔だ……とは思ったがその時はどうしても思いつけなかった。まだ、さほど寒くもないのに黒い襟巻を腮^{あご}の上まで巻き付けていたせいかもしれない。そうして慌てて果物？の包みを左に持ち換えた。その態度を見た瞬間にハハア……怪しいナ……と気付いた吾輩は、何気なく笑って見せた。

「イヤ失礼しました。田舎の電車は揺れますから……」

ナア二、東京の電車だつて揺れるのだが、取りあえず、そんなチャラッポコを云つて相手の顔をジロジロと見ると、その男は忽ち頬を真赤に染めて、ニヤリと笑い返しながらヒ

ヨコリと一つ頭を下げた。喧嘩したら損だと気付いたのであろう。そのまま何となく落付かない恰好で背中を丸くしながら、次第次第に前の方へ行くと、身動きも出来ない乗客の間を果物の籠で押分け押分け袖の下を潜るようにして運転台へ出て、呉服町交叉点から一つ手前の店屋町停留場へ近づくと、まだ電車が停まらないうちに運転手台の反対の方からヒラリと車道へ飛び降りた。その時に果物の籠の中でガチャリと音がした。疑もない麻雀の音だ。……ここいらの奴はまだ麻雀なるものを知らないらしいが……それを聞いた瞬間に、最前新聞社で聞いた急報電話の内容がモウ一度耳の穴の中で繰り返された。……税関……税関がどうしたんだ……何だ……マージャン……マージャンたあ何だ……。

吾輩は運転手に切符を渡すと、横つ飛びに電車から降りて、角の焼芋屋の活動ビラの蔭に佇んだ。向う側を見ると、飛び降りた若い男は、スレ違って停車した電車の蔭に隠れるようにして西門通りの横町に走り込んだ。

走り込んだと思うと、取っ付きの薬屋に這入って仁丹を一袋買った。それから暑そうに汗を拭き拭き鳥打帽と釣鐘マントを脱いで、果物の包みの上に蔽いかけたが、今までの風呂敷では間に合わなくなつたので、別の新しい大風呂敷を出してキューと包み上げながら店を出た。紺羅紗の筒ツポに黒い鳥打帽、黒い前垂れに雪駄という扮装だから、ど

こかの店員が註文品でも届けに行く恰好にしか見えない。しかも、そうした前後の服装の態度の変化がチツトも不自然じゃない。慣れ切っている風付きを見ると、一筋縄で行く曲^く者^{もの}じゃなさそうだ。二人の刑事が車掌台に頑張っていなかったら吾輩とても撒^まかれたであらう。

若い男は大胆にも、タツタ今刑事を載せて行つた電車のアトから電車道の大通りをこつちに渡つて、吾輩が立っているのに気が付いてか付かないで見向きもせずに通り返けて、西門通りの横町に這入つて行つた。それから二三町行つて小さな坂道を降りると、郵便局の前から又右に曲つた。オヤオヤこの辺をグルリと一廻りするつもりかな……と思ひ思ひあとから電車通りに出てみると、先に立つた若い男は呉服町の停留場まで来て、ちよつと躊躇しながら、右手の博多ビルデングの中へスウツと消え込んだ。

博多ビルデングというのは、この頃建つた福岡一のルネッサンス式高層建築で、上層の三階が九州随一の豪華を誇る博多ホテルになっている。その下の方はカツフェ、理髪、玉突、食堂なぞいうデパートになつていて、いずれも福岡一流のダンデーな紳士が行く処だそう。

そんな処とは知らないもんだから、若い男の後^{あと}から跟^ついて行つた吾輩は、ビルの玄関に

這入るとギョツとした。ナア二、設備の立派なのに驚いたんじゃない。正面の大鏡に映つた吾輩の立姿の見^み姿^{すば}らしいのに気が附くと、チャキチャキの江戸っ子もシヨゲ返らざるを得なかつたのだ。同時に、今の田舎からポツと出の青年店員みたような男が這入る処じゃないと気が付いた。

「畜生。俺を撒く了^{りようけん}簡^{かん}だな」

と思うと直ぐ鼻の先に居る下足番に帽^{シャツポ}子を脱いで聞いた。

「今ここへ若い店員風の男が這入つて来たでしょう」

「へエ……」

と下足番は眼を丸くして吾輩を見上げ見^み下^{おろ}した。やはり刑事か何かと思つたのであろう。

「そのエレベーターに乗つて行きました」

と指さす鼻の先へ、小さなエレベーターがスツと降りて来た。青い筋の制服を着たニキビだらけの小僧が運転している。

吾輩は直ぐにその中に飛び込んだ。

「お待遠様。どちらまで……」

とニキビ小僧が平べったい声を出した。

「今、ここへ店員みたような若い男が乗ったろう」

「ヘエ。……イイエ……」

「どっちだい。乗ったか乗らないか」

「若い断髪のお嬢さんならお乗りになりました」

「ナニ。若い断髪……」

吾輩は下足番の顔とエレベーターボーイのニキビ面を見比べた。二人とも妙な顔をしている。吾輩も多分妙な顔であつたろう。このビルデングの真昼さなかに幽霊が出るのじやあるまいかと疑っていたから……。

「向うの洗面所から出て来られた方でしょう。大きな風呂敷包をお提げになつた……」

「ウン。それだそれだ。鼻の高い、眉毛の一直線になつた女だろう」

「ヘエ。ベレー帽を冠つた、茶色のワンピースを召して、白い靴下にテニス靴をお穿きになつた」

「畜生。早い変装だ。黒羅紗の筒ツポの下に着込んでいやがつたんだ」

「ヘエ。変装ですか……今のは……」

「イヤ。こちらの事だ……君は東京かい」

「私ですか……」

「ウン君さ……」

「へエ。東京の丸ビルに居りました」

「道理でベレー帽なんか知っている……どこへ行つたいそのワンピースは……」

「四階の博多ホテルへお泊とまりになりました」

「フーン。支配人は何という人だい。ホテルの……」

「霜川さんですか。支配人ですが……」

「ありがとう。一泊イクラだい。ホテルは……」

「へエ。特等が十円、一等が七円、普通が四円で、ダブルの特等は十五円になっております。別にチップが一割……」

「フウン。安いな。俺も泊るかな」

ボーイが吾輩の顔を見てニヤニヤと笑いやがった。どうも貧乏をすると余計な処へ来て、余計な恥を搔かく……畜生。どうするか見やがれ……。

「へイ。お待遠さま。ホテルで御座います」

ボーイが開けた網戸から追い出されるように飛び出した吾輩は、久し振りに眼の醒さめる

ようなサルーンに直面させられて、少なからず面喰らった。

けれどもその次の瞬間にはモット面喰らわせられる大事件が持上った。そのサルーンの一歩手近い向う向きになつてゐる長椅子の派手な毛緞子ダマスクの上からスツクリと立上った艶麗な花を欺くような令嬢……だか化生けしやうの女だかわからない女が吾輩と直面した。しかも、その直面した白い顔がタツタ今追いかけて来た若い店員の顔だったのには肝を潰した。ちよつとトイレットに這入つて、黒い外套と、雪駄せつたと、鳥打帽を風呂敷に包み込んで、テニス靴を穿いて、白い粉をポカポカツとハタいて、棒紅をチヨコチヨコと嘗なめただけの芸当には違ひないが、それにしてもアンマリ早過ぎる。沉いんやそれを玄関番が見た時は店員で、エレベーターボーイが見た時は令嬢だったというんだから大胆といおうか不敵といおうか、唯々舌を捲かざるを得ない。おまけにその容易ならぬ曲者くせものは、吾輩の顔を見ると、溶とけるような心安さでイキナリニツコリと笑いかけたものだ。

「お久しう御座います。羽束さん」

吾輩は二三歩ヨロヨロと後うしろに退さがった。

……何がお久し振りだ。……何が羽束さんだ……。

と唾液つばを嚙のみ込み嚙のみ込み相手の顔を白眼にらみ付けたが、その瞬間に……ヤアーツ……と

叫んで天井に飛び上りたくなつた。

……お久しい筈だ。この女こそ箱師のお玉といつて名打ての女白浪だ。東京で警視片に上げられる度に、吾輩から感想を話させられた女だ。この女の身の上話を雑誌にヨタツたお蔭で吾輩は多量の原稿を稼いでいる。いわば吾輩の大恩人だ……と気が付くトタンに吾輩の心理状態がクルリと転向した。

西洋の名探偵心理から、一足飛びに、純粹の江戸ツ子心理に寝返りを打った訳だ。もつとも好き好んで變化した訳じゃない。そうしなければ太刀打出来ない窮境に陥りかけている事を本能的に自覺したせいであつたろう。トタンにお玉が差し伸べた手をシツカリと握つたものだ。お玉は吾輩の耳元に唇を寄せて囁いた。

「羽束さん。あんた非道い人ね、あたしをどこまで苛めるつもり……」

可哀相にお玉の眼には涙が浮かんだ。あとの文句は聞かずともわかつている。東海道で稼げなくなつて、上海、長崎の門管ラインに乗換えたところを又、古疵同然の吾輩に付き纏われてはトテモ叶わないというのだろう。吾輩は然ろにお玉の窮況に同情してしまつた。

「ね。後生だから今日だけ、お狴染甲斐に妾を助けて頂戴。ね。妾、武雄の温泉で長崎

から宝石入りの麻マージャン雀を抱えて来た男の荷物を置き換えて来たんだから。その男が税関の役人に押えられる間際によ。そうしたら、武雄の刑事が喰い付いて来たから、妾ここで振り撒くつもりで降りたらモウ一人福岡署から加勢が来ている上に、アンタまで跟つけて来るんだもの。妾モウすっかり観念しちゃったけど、アンタの気心がまだわからないから、行くところまで行ってみるつもりでここまで来てみたのよ。……ね……アンタ後生だから今夜妾と一緒に泊って頂戴。アンタ今、どこかここいらの新聞社に這入っているんでしょ。だから妾を奥さんにでもして、一緒に泊めて頂戴。御恩は一生忘れないから。仕事は山分けにしてもいいから……ね……後生だから……ネツ……ネツ！」

と云ううちに燃ゆるような熱情を籠めた眼付で、今一度、吾輩を見上げ見下みおろした。吾輩はその瞬間純色透明になったような気がした。この素寒すかんぴん貧姿を見上げ見下ろされては、腸はらわたのドン底まで見透みすかされざるを得ない。純色透明にならざるを得ない。吾輩は黙って一つ大きくうなずいた。大いに引受けたところは誠に立派な男であったが、トタンに眼の前で、桃色と山吹色の夢の豪華版が渦巻いたのは吾ながら浅ましかった。事実この時に吾輩は夢ではないかと自分自身を疑ったくらいだ。地獄から極楽へ鞍替えをした亡者はコンナ気持ちだろうと思って、ひとりでに胸がドキドキした事を告白する。

吾輩はそれから鷹揚おうような態度で、支配人の霜川なる人物を呼び出して特等の部屋を命じた。中ちゆう禿うはげの温厚らしい支配人は、叮嚀に分けた頭を叮嚀に下げて、紅茶を入れた魔法瓶を手ずから提げて来て最上階の見事な部屋に案内した。さながらに映画スターの私プライベイト室然たる到れり尽せりの部屋だ。モット立派な部屋を見た事は何度もあるが、しかしそれは単に見ただけで泊った事は一度も無い事を念のため今一つ告白しておく。況んや、お玉みたような別嬪べっぴんと、同じ卓子テーブルでカクテルを傾けようなんて運命を、夢にも想像し得なかつたのは無論であつた。甚だ甘いところばかり告白して申訳ないが、事實は甚だ苦々しいんだから勘弁して頂きたい。

「ねえ御覧なさい。いい月夜じゃないの」

「ああ。博多灣つてコンナに景色のいい処たあ思わなかつたね。玉ちゃん初めてかい」

「ええ。初めてよ。いわば商売髻がたきのアンタとコンナ処でコンナ景色を見ようなんて思わなかつたわ。チイツトばかりセンチになりそうだわ」

「——僕もセンチかミリになりそうだ。ねえ玉ちゃん。僕も実はスツカリ東京を喰い詰めちゃつてね。はるばる九州クンダリまで河合又五郎をきめて来たんだ。そうしてタツタ今、玄洋新聞社に這入つて、記事を取つて来いって云われたもんだから、一気に飛び出して来

たら君にぶつかつちやつたんだ」

「大変なものを自摸^{ツモ}しちやつたのね」

「ウン、万一ヘマを遣ると君と一緒に新聞記事にされた上に、オマンマの種に喰付き損になるんだ」

「困るわね」

お玉は真剣に吾輩の事を心配しているらしく、両手をワンピースの膝の上で拝み合わした。実は、吾輩もここでこの女に宿賃なんか払わしちや江戸ツ子の名折れになる。どうかして編輯長に電話をかけて、せめてこの宿賃だけでも月給の前貸しをしてくれと頼みたい一心でコンナ話を持ち出したのであったが、そこは相手が女だけに、吾輩のそうした腹を察し得なかつたらしい。何か思案しながらジツと閉じていた眼を、やがて嬉しそうに見開くと、両手をポンとたたき合わせて椅子をスリ寄せて来た。

「——それじゃアンタ……いい事があるわ。明日^{あした}ね。妾^{めかけ}が、この麻^{マージャン}雀^雀の籠^{かご}を持って大阪へ行ったら、ここの警察へ思い切り馬鹿にした投書をするから、その投書を新聞に素^すッ破^は抜^ぬいてやつたらいいじゃないの。アンタが書いた文句を妾^{めかけ}が写して行ってもいいでしょう。そいつを記事にしたら警察でもビックリするにきまつているわよ」

「ウーム。それもそうだな」

「何とか面白い文句を考えて頂戴よ」

「駕籠^{かご}を抜けたが麻^{マージャン}雀^{さつ}お玉。警察のガチャガチャ置き土産。アラ行っちゃったア……
つていうのはどうだい」

「——ナアニ。それ安来節！」

「ウン。今浅草で流行^{はや}り出している」

「面白いわね。妾今夜踊るわ、その文句で——」

「止せよ。見つともない。ワンピースの鰯^{どじょう}すくいなんかないぜ」

「新聞記者救いならワンピースで沢山よ」

「巫戯^{ふざけ}化するな」

「フザケやしないわ。真剣よ。東南西北^{トナンシーペー}苦勞の種をツモリ自摸^{つも}って四喜和^{スーシーホー}っていう
歌もあるわ」

「アラ。振っちゃッタア……つてね」

「まあ憎^{にく}らしい」

「アハハハ……あやまつたあやまつた……」

三

あくる朝眼が醒めた吾輩は象牙色の天井を仰ぎながら考えた。夢を見ているのじゃないか知らんと思った。それから博多湾の朝景色を見晴らす窓を見て、ヤット昨夜ゆうべの事を思い出した。その時にフィツと気が付いて隣りの部屋を覗いて見ると、箱師のお玉が居ない。卓子テーブルの上に香水のプンプンするハンカチが一つ残っている切りである。

吾輩は無性に腹立たしくなった。何かしらシテヤラレタという感じに打たれながらベルを押すと、ボーイが来ないで、支配人が、魔法瓶と新聞を両手に持つて這入つて来た。

「お早よう御座います。お風呂が湧いております」

と云い云い妙にニコニコ笑っているのが気になった。

「連つれの人はどうしたい」

「ハイ。今朝けさ早く、お出ましに……お立ちになりました」

と云い紛らしながら、うつむいた。

可笑おかしくて堪まらないのをジツと我慢している恰好である。いよいよ気になった。

尤も笑われるのも無理はないと云えば云える。日本一の間抜け面^{づら}に違いなかったんだから……。

「今何時頃なんだい」

「ハイ……五時過で御座います」

「何……五時過……いつの……」

「へへへ……今日の……」

「きようは何日だい」

「二十一日……」

「ハイ……只今出ました夕刊で御座います」

と夜卓^{ナイトテーブル}子の上に置くや否や、支配人は最早^{もう}一刻もたまらないという風に、お辞儀を

してコソコソと出て行つた。吾輩は博多湾内の光景を今一度見まわした。成る程夕方に違いない。曇っているもんだから、夕景色が朝景色に見えたんだ。

何ともいえない不安な氣持に包まれた吾輩は、取る手遅しと玄洋日報の夕刊を引き開くと、下らない海外電報が、薄汚ない活字で行列している。東京の新聞の切抜らしいのが特に大きく載せてあるのが浅ましい。吾輩はチョットの間^ま憂鬱^{きゆううつ}になった。昨日^{きのう}門司で質に置

いた懷中時計が、矢張り五時頃を指しているだろうと妙な悲哀に囚われながら、第二面を開くと、アツと驚いた。マン中の目貫の処に、お玉の写真がデカデカと載っている。

箱師のお玉捕えらる

今朝博多駅にて

警察を愚弄した手紙と

密輸宝石数万円携帯

兼ねて東海道線を荒しまわつて東京と大阪の警察に散々御厄介をかけていた箱師のお玉（二七）という有名な拘摸が、福岡署の網に引っかかつて捕えられた。同女は最近、その筋の手配が厳しいため、東海道線では仕事が出来なくなり、長崎上^{シャンハイ}海航路に眼を付けて九州線に入り、武雄温泉に入浴中、同宿の浴客の手廻りの中より、宝石密輸入用の麻^{マージャン}雀（支那の賭博具）一箱を盗みて博多に來り、氏名不詳の青年と同伴して、巧みに追跡の刑事の眼を眩まし、博多ホテルに投宿し、夫の如く装わせた同宿の青年に麻醉藥を飲ませ、ホテルの支払を済ませて後、今朝上り七時三十分の急行列車にて大

阪に高飛びせむとするところを、張込の刑事に押えられたるものなるが、懷中には、「梅田駅」より「お玉拝」「福岡警察署御中」と認めたる当局を愚弄せる手紙を所持しおりたる模様にて、その大胆不敵さには福岡署員も呆れおりたり。

四

ここ迄読んで来た吾輩も呆れて了つた。昨夜飲まれたカクテルの睡眠薬に引つけられて二十時間近くも白河夜船でいる間にチャント新聞記事にされて了つてゐる。おまけにホテルの支払まで済まされて姓名不詳扱いにされていれあ世話はない。アラ行ツチャツターの辻占がチツト当り過ぎた。

「畜生……どうするか見ろ」

と独言を云いながら起き直つてみたがモウ間に合わない。

その時にフト寝台の下を見ると、タツタ今新聞の間から落ちたらしい手紙が一通、脱ぎ揃えたスリッパの上に載つかっている。オデコを窓枠にぶっ付けながら拾い上げて見ると赤インキの走り書きで、

羽 束 友 一 大 兄

霜川支配人委託

と表に……裏面には読み難い^{にく}蚯蚓^{みみずたい}体の走^{はしりがき}書^きで「津守老生」と署名してある。慌てて封を切つてみると、いよいよ読み難い赤インキのナグリ書きが古い号外の裏面に行列している。

「冠^{かんしょう}省、昨夜博多ホテル霜川支配人より、玄洋日報社に羽束と称する記者ありやと尋ねられしまま、失礼ながら小生保証^{いたしおき}致^し置^{おき}候^{こう}。序に御同宿の婦人の事、同支配人より委^{くわ}しく拝承、貴殿ならではそこまで引っぱり込み得ざる相手と存じ、本社の特種と致^{いたしたく}度、警察と打合わせ手配を依頼^{つかまつり}仕^し候^{こう}。そのため貴殿にも何事も洩らさず同婦人に自由行動を執^とらせ候段、何卒不^{なにとぞ}悪^{あしからず}御諒恕賜^{ごりようじたま}わりたく、貴殿の御骨折^{あいね}に對しては警察当局も感謝^{いたしおり}致^し居^{そうろう}候。御ゆつくりと御休息の上、明日より御出社相^{あいで}願^{がいたく}度^ど委細はその節を期し申^{もうし}候^{こう}。

封入の金子^{きんす}、貴殿俸給の内^{うちわたり}渡^たに有^{これあり}之^{そうろう}候^{あいだ}間^{かん}御査収願^{ねがいあげ}上^{そうろう}候^{こう}

匆々

つも り印」

封入の札を数えてみると十円で七枚あつた。吾輩は舌なめずりをした。それから顔をツルリと撫でまわして又一つ舌なめずりをした。津守編輯長のためなら火水^{ひみず}にでも飛込む気で、靴下を穿いた。

両切煙草の謎

ちはやふる山羊髯の、津守編輯長ばかりはドウ考えても奇妙な人間だ。内容、外觀共に、古今稀^{まれ}に見る麻迦^{まか}不思議な存在だ。

誰でも新聞紙を拵^ねげて見ればわかるだろう。どんなにケチな新聞社でも編輯長となると、生^{なま}優しい脳髓^{なまや}や精力では勤まるものでない。第一面の海外電報、東京電話の早し遅し、捏造^{ねつぞう}記事か与太^{よた}記事かを見分けるためには、猫の眼玉みたいに變化する世界列強のペテンのかけ合いから、インチキとヨタでゴツタ返す政局の裏表、瓢^{ひょう}箏^{そう}、鯰^{なます}の財界の趨勢、銀行会社の金庫のカラクリ仕掛まで看破していなければならない。第二面の地方硬派、鼻^は糞^{なくそ}記事の軽重、大小を見分けるためには鶏^{とり}の餌箱^{えぼこ}式の県予算、賽^{さい}の河原^{かわら}式土木事業の進行状態、掃^{はき}溜^{だめ}式市政の一般、各市町村のシミツタレた政治分野、陣笠代議士、同じく県議、ワイワイ市議、それらの動静、財産、趣味、道楽まで知っていなければならない。又、

お次の所謂^{いわゆる}三面、軟派記事の取扱い方については、その新聞の読者の智識、生活程度の各層の神経の過敏程度は申すに及ばず、ヒネクレまわる思想傾向の機微から、全国一般の社会悪の種類、程度、各地方の風俗習慣、又は、ダラシのない支局通信員の特質、能力、市内その他の花柳界の情勢、待合、芸者のパトロンの尊名から、今東京で封切られている映画が、いつ頃、どこの社の手で、当地方^{こち}のどこの館にかかるか……なぞいうヤヤコシイ事まで、要するにそこいら中に在りとあらゆる何でもカンでも知っていなければ勤まらない。おまけに競争相手の新聞社の通信、編輯能力、工場の能率なぞいうものを隅から隅まで見透しているという、つまるところ、大艦隊の指揮官級の頭脳で、善悪共に社会のトップのトップを切った記事を撰^よりすぐつて、ほかの新聞と競争して行かなければならない……と云つたら大抵の人間が眼を眩^まわすだろう。そんなドエライ人間が、各新聞社に一人ずつ割当てるほど日本に居るか知らん……と肝を潰すかも知れないが、論より証拠だ。そんな人間が一人でも半分でも居なければ、新聞記事の統一が出来ないのだから仕方がない。

実際一つの新聞の編輯長となると、どんな貧弱な新聞社へ行っても相当の働らき盛りの、生き馬の眼を抜きそうな人間が頑張っている。一筋縄にも二筋縄にもかからない精力絶倫、機略縦横、血もなく、涙も無いといったような超^{ちようどきゆう}努級のガツチリ屋が、熊鷹式の眼を

爛々と光らしているものだ。

ところがこの玄洋日報社はドウダ。

見る影も無いビツコの一寸法師で、木乃伊^{ミイラ}同然に痩せ枯れた喘息^{ぜんそく}病みのヨボヨボ爺^{じじい}と云つたら、早い話が、人間の廢物だろう。そいつが煎餅^{せんべい}の破片^{かけら}みたいな顎に、黄色い山羊髯を五六本生やして、分厚い近眼鏡の下で眼をシヨボシヨボさせている姿は、如何に拝み上げて山奥の村長さんか、橋の袂^{たもと}の辻占^{うらなひ}者か、浅草の横町でインチキ水晶の印形^{いんぎよう}を売っている貧乏おやじが、秋風に吹かれて迷い込んで来たと思えないだろう。吾輩みたいな、東京中の新聞社を喰い詰めた、パリパリの摺^すれつ枯らし記者の上に立つ編輯長とは、どう割引しても思えないだろう。

ところがその山羊髯老爺^{おやじ}がソレでいて、ドコか喰えない感じがする。凄いところが在りそんな気がして、たまらなく薄気味が悪いから怪訝^{おか}しい。早い話が昨日^{きのう}だつてこの老爺^{おやじ}は、タツタ一眼、顔を見合わせただけで、どこの馬の骨だか、牛の糞だか判然^{わか}らない……しかも悪タレ記者である事を名乗り上げている吾輩を見事手玉に取った上に、黙つて七十円の大金を呉れている。むろん吾輩も七十円以上に価する名記事を取るには取った……取らせられたつもりだが、今日会つて、改めて御礼を云つても……オヤ、そうでしたか……とい

つたような顔で朝日を輪に吹いている。続いて働らいてくれとか、履歴書を出せとかいうような挨拶を一言もしないで空^{そらうそぶ}嘯^{ささ}いている事は昨日の通りである。むろんこっちからも……引続いて雇^かつてくれるかどうか……なんて念を押すようなヘマはしない。ウツカリ云い出して「別に雇^かつた訳ではありませんが」とか何とかフワリと遣^すられたら、摺^すれっ枯^からしの沽^こ券^{けん}に拘^かわるばかりじゃない。折^せ角^{かく}あり付きかけた明日のオマンマがフイになる。何とも云わずに図々しく居据^ゐわる事だ。そうして追い出そうにも追い出し得ないスバラシイ記事を今日も一つ取る事だ。……そう思い思い編輯室^{とまり}の隣室^{となり}の応接間に架けて在る玄洋日報綴^{とじこみ}込^こを、丸卓子^{テーブル}の上に引出して、前月以来の三面記事を次から次へと引っくり返してみると……。

……あるある……。

福岡県の管轄内だけでも未解決の犯罪記事がウジャウジャ在る。……どうせ田舎の警察と新聞だから、見落しばかりの手抜きばかりで、片^{かた}端^{たん}から迷宮に逐^おい込んだのだろう……なんかと思ひ、そんな迷宮事件や尻切蜻蛉^{しりきるとんぼ}事件の一つ一つを点検して行く^{めぼ}と、目星^{めぼ}しい記事がタツタ一つ見付かった。

それは殆んど完全に近い迷宮事件と見える殺人事件であつた。手口は極めて残忍な割に

犯跡がわからないらしく、既に搜索に次ぐ大搜索後、一箇月を経過している。……ヨシ……コイツを一つ解決して吾輩の腕前を見せてやろう。吾輩一流のヨタやインチキを絶対に用いない地道な、五分も隙の無い本格式の探偵法で、ドン底までネタをタタキ上げて、あの山羊髯をギャツと云わせてくれよう。ついでに県下の警察と新聞社の眼球を刮り抜いて、押しも押されぬ雷名を轟かしてくれよう。

……事件の内容は極めて簡単である。

去る十一月三日（大正十一年）、の午前中の出来事だ。

福岡市外、箱崎というと有名な筈崎八幡宮の所在地だろう。その八幡宮の横町に在る下駄屋が、まだ寝ていると見えて、表の板戸をピツタリ卸したままである。……いつも早起きの爺さんが……と近所の者が不審を起して、午前の十一時頃になってから、表の板戸を引っばってみると、何の苦もなくガラガラと開いた。見ると下駄や草履を並べた表の八畳の次の六畳の間の上り框の中央に下駄の鼻緒だの、古新聞だのが取散らしてある中に、店の主人一木惣兵衛（六十四歳）が土間の方を向いて突伏している。そのツルツルの禿頭は上框からノメリ出して、その真下の土間に夥しい血の凝塊が盛り上っている。脳

天の中央に、鉄槌^{かなづち}様の鈍器で叩き破られた穴がポコンと開いて、真黒な血の紐^{ひも}がユラユラとブラ下がつていた。何等の苦悶の形跡^{あと}も無い即死と見えた……という簡単な死に方だ。その屍体の両手は、鼻緒をスゲ掛けた、上等の桐^{きりまさ}杙^えの駒下駄をシツカリと掴んでいた……：というのだから、註文したお客が、仕事に氣を取られてゐる老爺^{おやじ}の油断を見澄まして、一撃^{ひとつ}ちに殺^やつたものに違いない。現に兇行用のものに相違ない、尖端^{はし}に血の附いた仕事用の鉄槌が、おやじの右脇に在る粗末な刻みの煙草盆の横に転がつていた。兇行後、無造作に投出して行つたものと認められた。そのほかに手懸りらしいものといつては一つも半力ケも認められない（参考のために附記しておくが、その時分大正十一年頃までは指紋法が全国に普及していなかった）。

ただ、それだけの現場^{げんじょう}である。何も無くなつた品物も無く、荒らされている形跡も無い。近所の者の話によるとこの爺^{おや}さんは綽名^{あだな}を仏惣兵衛^{ほとけ}と呼ばれてゐた位の好人物だつたそうだ。古くからこの土地で小さな下駄屋を遣つてゐたが、儲^{もう}けた金は病人の女房の養生費にアラカタ注^つぎ込んでいたものだという。だから今度の災難もその女房が、養生に行つた留守中、タツタ一人で自炊してゐたために起つた事件に違いないが、売溜^{うりだめ}の十一円なにがしの金は、三百四十円ばかりの貯金の通帳と一^{いっしょ}所に、手提金庫の中にチャンと在

ったのだから、それを目的の仕事とは思えない。しかし又一方にこの惣兵衛さんはモウ六十いくつで、仏と云われる位の好人物だったし、女房のおチカ婆さんというのが又、近所でも評判の堅造^{かたぞう}だったから、色恋の沙汰も、人に怨まれるような事も在りそうに無い……というのがこの事件の核心的な不思議の一つであつた。

そのうちに伊勢の山田の灸^{きゆうてん}点^{てん}の先生の処へ行つて養生をしていた、女房のお近婆さんが驚き慌てて歸つて来たが、大学で解剖後、火葬に附せられた亭主の骨壺を抱いて、涙に暮れるばかりであつた。

「只今まで警察で厳しいお調^{しらべ}を受けましたが、妾^{あたし}はマツタケ何も存じません。妾はこの亭主に一生苦勞をさせ通して死に別れました。子供は無いし、これぞという親戚も無いし、跡^{あと}はどうしてよいやら途方に暮れております。

結婚後、血の道から癆^{ろう}性^{しょう}になつて、その灸が利くとか、御祈祷がよいとか聞きたんびに、西から東と走りまわつて養生をしておりましたが、その養生の費用を稼ぐばかりで亭主は一生を終りました。お前が健康^{じょうこう}になつてくれさえすれば、どこからか二千元ばかり算段して来て、下駄^{おろし}の卸問屋^{しとんや}をして、自分で卸してまわるのに……と云うておりました、それも今は夢になつてしまいました。この家^{うち}でも売つてお金にして、門司に居

る甥^{おい}の処へでも行くより外に仕方はありません……云々……」

こうした言葉を警察では凶星^{ずぼし}に信じてしまったらしい。結局、犯行の目的がわからぬとなると、直ぐに市内の浮浪狩を初めて、怪しいと思う奴を片ッ端^{かたばし}からタタキ上げたらしい記事が、それから二三日おいて連続的に掲載されているが、つまらない狐鼠泥棒^{こそどろ}ぐらいのものを掘出しただけで、下駄屋殺しの嫌疑者らしい者は影法師すら発見出来なかった。それっきり事件は迷宮に這入ってしまったて、世間からも新聞社からも忘れられているらしい。これだこれだ……。

コンナ美味^{うま}い材料^{ねた}が外に在るものか。特に吾輩のために警察が取つといてくれたような迷宮事件だ。

第一、人を殺すのに目的無しで殺す奴があるものじゃない。

第二にコンナ気の小さい、苦労性な老爺^{おやじ}は、儲けた金を銀行や郵便局へ預けるほかに、よく現金のマンマで、どこか人の知らない処にシコ溜^{かねた}めている例があるものだ。殊に世間から、正直とか、仏とか呼ばれている人間にソナ種類の金溜^やめ屋が多いのは、吾輩が覗きまわった種々雑多な社会層^{うち}の中で屢々^{しばしば}見聞しているとある。——とか何とか気取らなくとも、新聞の所謂^{いわゆる}三面記事に気を附けている人なら、直ぐに首肯出来る事実で

あろう。

第三に、この兇行は元来、計画的のものらしい臭味においがして仕様がな。現げんじょう場あつちを見なければ判然わからないが、その秘密の現金を狙った奴が、わざと老爺じしに上等の下駄を誂あつちえて、仕事にかかった油断を見澄みすまして一氣に遣つ付けた仕事だ……という感じが新聞記事を読んだだけで直ぐにピインと来るのではないか。そうなれば犯人は、事に慣れた前科者か、又は、ズブの初心者が演出した偶然の傑作か、どちらかの二つに一つでなければならぬ。……が……しかしこれは前にも云う通り現場を見なければ、何とも断定出来ない。

これだけの見当が付けばアトは犯人の手がかりだが、サテ一ヶ月以上も経過している今日まで、現場に手がかりらしいものが残っているか……残っていても吾輩みたようなインチキ名探偵の眼に映るか、映らないか……そこが問題だ。

お恥かしい話だが、吾輩、コンナに真剣になつたものは四五年以前に東洋時報社で、初めて社会部外交記者に編入されて三面記事を取りに行った時以来、今度が初めてである。その途中から今日までは百中九十九パーセントまでヨタとインチキのカクテル記事で押通して来たものであるが……。そのお蔭で色々な失策エラーを連発して、方々で首種くびだねが尽きるくらい鹹くびきられ続けながらノコノコサイサイ生き永らえて来たものであるが、今度という今度

ばかりはそうは行かない。ヨタやインチキが直ぐに暴露して、身に報^{むく}いて来る世の中の恐ろしさを既に知り過ぎるくらい知っているばかりじゃない。人間、喰えるか喰えないか……最後の米^{こめ}櫃^{びつ}を、取上げられるか、られないかのドタン場まで来ると、こうも真剣になるものかと、我ながら感涙^{むせ}に咽^{むせ}ぶばかり……。

なんかと浅ましい感傷^{センチ}に陥りながら吾輩は、その記事を持って、眼立たないように編集室に這入った。モトの我輩なら昨日^{きのう}の山羊髯の手紙を見ただけでイキナリ編輯室に乗込んでノサバリ返っている筈だが、今度は正式に社長から入社^{しやう}の許可を受けるまで、客分のもりで応接室に腰を据えて、恭^{きやう} 儉^{けん}己^{おのれ}を持^じするつもりだ。これも吾輩のセンチかも知れないが……。

見ると山羊髯のおやじは仕事が閑散だと見えて、大阪の新聞の経済欄を読みながら、朝日を吸^せつては咳^せき入り、咳^せき入つては水ツ涙^{ばな}をすすり上げている。タヨリない事夥しい。その背後から近付いて、吾輩が赤鉛筆の筋を引いた下駄屋殺しの記事を指して見せたら、山羊髯は例によつて小さな眼をシヨボシヨボさせた。蚊の啼くような声を出した。

「ホホホ。又何か仕事を見付けなさつたか」

ずいぶん人を喰つた挨拶だとは思つたが、この場合、腹を立てる訳にも行かない。

「エエ。仕事を見付けなけあ逐い出されそうですからね」

「ヒツヒツヒツ。ジッヘン。ゴロゴロゴロゴロ。ホホホ。何の記事かいな」

吾輩が差出した新聞の綴込を抱えた山羊髯は、紙面を鼻の先に押付けて、初号活字の標^み題^{だい}を探り読んだ。コンナ盲目^{めくら}同然のおやじを、御大層に飼つとく新聞社は、まったくのところで、日本全国に無いだろう。

「この記事は今でも迷宮ですか」

山羊髯は記事を半分読みさしたまま、分厚い鉄縁の近眼鏡を外して、郡山の羽織の袖で拭いた。それからその眼鏡を片耳ずつ叮嚀に引っかけると、痩せ枯れた手でノロノロと山羊髯を撫でた。これだけの科^{しぐさ}でも、生き馬の眼を抜く編輯長の資格は落第なんだが。

「ホツホツホ。新聞では迷宮じやが……サアテナ……實際はモウ解決が付いておりはせんかナ……ホツホツヒツヒツ……」

「それじゃ貴方^{あなた}には見当が付いてるんですか」

「付きませんな。現^{げんじょう}場を見ておらんから」

「ヘエ。そんならドウ解決が付いてるんで……」

「目的無しの犯罪チウは在りませんてや」

「賛成ですね。僕も同意見です。ですから……」

「それじゃからその目的はモウ遂げられとる頃と思う」

「その目的というのは金でしようか、それとも……」

「加害者に聞いてみん事には解りません」

「被害者の後家さんはどこに居るか御存じですか」

「後家さんに当つても無駄じやろう。根が馬鹿じやけに何も知らんじやろう」

「そうですねあ。僕は後家さんが一番怪しいと思うんだがなあ。その後家さんと、どうかして心安くなつた犯人が、共謀して……」

「ヒツヒツ。箱崎の警察もアンタと同意見じやつたがなあ。後家さんは何も知らないでもこの事件は立派に成立する可能性がある。寧ろ後家さんは全然無関係の者として研究した方が早くはないか。後家さんを疑うたらこの事件は迷宮に這入るかも知れんと、ワシが最初に云うておいたが、果してそうじやつた。それじゃから、よしんばアンタの男前で後家さんを口説き落しても何も掴めまいてや。無駄な事は止めなさい。昨夜のお玉さんなんぞと違うて、モウええ加減な婆さんじやからのう。ヒツヒツヒ」

「ジョ冗談じやない。モウそんな裏道へは廻りません。真正面から現場^{げんじょう}を調べてみま

す。それから近所の住人の動静を探ってみます。とにかく僕が一つ迷宮の奥まで突抜けてみます」

「ホホ。途中で警察の世話にならんようにナ」

「承知しました」

吾輩はそのまま、威勢よく玄洋日報社を飛出した。

外に出てみると晩秋から初冬にかけて在り勝ちな上天気だ。

福岡市外というから箱崎町はかなり遠い処かと思つたら何の事だ。町続きで十分ぐらいしか電車に乗らないうちに、はこぎ箱崎神社前という処に着いた。鳥居前に立つてみると左手の二三町向うにひのみやぐら火見櫓が見える。田舎の警察というものは大抵火見櫓の下に在るものだ。事件は警察の直ぐ近くで起つたんだなと気が付いた。

思つたよりも立派な神社なので、思わず神前にシャツポを脱いで一錢を奮発した。今日の探險を成功せしめ給えと祈つた。自分でも少々おかしいと思つたが、人間、行詰まると妙な気になるもんだ。俺みたようなインチキ野郎の御祈祷に、見通しの神様が引つかかつてくれるか知らん……なぞと考え考え、お宮の北側の狭い横町に出て来た。境内一面のくすのき楠の下枝と向い合つて、雀の声のやかま喧しい藁葺屋根が軒を並べている。御維新以前からのま

んまらしい、陰気なジメジメした横町だ。

……ここいらに違いない……と気が付いて見廻わすとツイ鼻の先に、軒先一面にペンペン草を生やした陰気な空屋があつて、閉て切つた表の戸口に「売貸家」と書いた新聞紙がベタベタと貼つてある。その左隣は近ごろ開店したらしい青ペンキの香のブンブンする理髪屋で、右隣は貧弱な荒物屋兼駄菓子屋だ。どうもこの家らしいと思つて、右側の駄菓子屋のお神さんに聞いてみると果してそうだった。

「何か判然りまつせんばつてん、事件から後、夜になると隣家の家の中をば、火の玉が転めき廻わるチウお話で……」

と覺えたような眼付をした。その火の玉というのは、犯人が被害者の隠している金を探している懷中電燈の光りじやなかるうか……といったような想像が、直ぐに頭へピーンと来た。だいぶ神経が過敏になつていたらしい。

「隣家の地面はまだ売れないんですね」

と店先の燐寸でバツトに火を点けて神経を鎮めながら聞くと、

「イイエ。貴方。人殺しのあつた家チウて、あんまり評判が悪う御座いますきに誰も買ひに来なざつせん。わたしの家も気味の悪う御座すきに、どこかに移転うて云いおります

ばってんが、この頃、一軒隣に、新しい理髪屋が出来まして、賑やかになりましたけに、どうしようかいと考え居ります」

「へエ。あの理髪屋はここいらの人ですか」

「いいえ。どこの人か、わかりませんが、親方さんが愛嬌者だすけに、流行ります。あなた……」

「僕は隣家の空屋を見たいんですがね」

「へエ……あなたが……」

「僕が……実は隣家を買いたいんですが」

お神さんは妙な顔をして吾輩を見上げ見下した。ドンナに見上げても見下しても家屋敷を
買おう……なんていう御仁体でない事を自覚していた吾輩は、内心ヒヤヒヤしながら
拾い物のステッキを斜に構えて、バットの煙を輪に吹いて見せた。するとお神さんが、慌
てて襟元を繕って、櫛巻髪を撫で上げて敬意を払ったところを見ると、多分ソレ位の金
持に見えたのであろう。

「へエ。それは貴方……それならこの家の裏からお這入りなさいませえ。表の戸口は鍵
掛けてはおりませんってん、裏口の方からは眼立ちませんけに……どうぞ……」

お神さんは吾輩が、もしかすると隣家へ来る人かも知れないと思つたらしく早くも親切と敬意を見せ初めた。ここで本格式に行くところのお神さんを捕まえて、根掘り葉掘り当時の状況を聞き訊すところであつたが、気が急いでいたのであろう、吾輩はそのまま駄菓子屋の裏庭を通り抜けて、問題の空屋の裏口から、コツソリと這入つて行つた。

勿論被害者の後家さんが何とか処分したものと見えて、家の中の畳は一枚も敷いて無いし、建具も裏二階の階子段までも外してあつた。台所には水棚も水甕も無く、漬物桶を置いたらしい杉丸太の上をヒヨロ長い蔓草が匍いまわつていた。空屋特有の湿っぽい、黴臭い臭いがプンと鼻を衝いた。

犯行の現場は直ぐに判明つた。裏口から這入ると、田舎一流の一間幅ぐらいの土間が表の通りへ抜け通つている。その右側は土壁で、左側に部屋が並んでいる。その中でも表の八畳が下駄を並べた店らしく、ホコリだらけの棚が天井裏からブラ下がっている。その次の六畳の間の間が被害者……仏惣兵衛の仕事場だったらしく、土間の上り框の真上の鴨居に引き付けた電燈の白い笠が半分割れたまま残っている。球は無くなっているが、土間の上の屋根裏の天窓から射し込む、青い青い空の光りで見ると、その上り框の前の土間に、血の上に灰を撒いたらしい一尺四方ばかりの痕跡が一個所残っている。その灰の痕跡

は最初、堆うずたかかつたものであろうが、血餅ちのりが分解して土間に吸い込まれるし、盛上つた灰が又、湿気のためにピシャンコになつているので、その下に在つた塵屑ごみくずの形を、浮彫レリーフみたいに浮き出させている。マッチの棒、鼻緒の切端きれはし、藁切わらきれなど……その中に煙草の吸殻らしいものが一個、平べったく粘り付いているのが眼に付いた。多分、犯行当時は真黒な血餅の下に沈んでいたので、誰にも気付かれないまま灰を振りかけられたものであろう。その吸殻に懷中電燈を照しかけながら、念入りに検分してみると、それは半分以上吸い残した両切りようぎり煙草が、血の湿気のために腹を切つて展開ひろがつた奴で、バットかエアシップぐらいの大きさの巻きらしい。ステッキの尖端でその周囲を引つ掻いてみたが、吸口すいくちらしいものはどこにも見当らなかつた。ただ血と灰とが混合して発生したらしい、甘い臭気がプーンとしただけであつた。吾輩はホツと溜息をして顔を上げた。

金口きんぐちでない両切煙草を、吸口無しで吸う奴は、相当のインテリだろう。新聞記事によると、殺された老爺じいは傍に刻みの煙草盆きやを引寄せていたというのだから十中八九、これは犯人が吸い棄てたものではないか……しかも半分以上残つているとを見ると、吸いさしたまま投棄ていてて犯行に移つたものではないか。その上から血餅が盛り上り、灰が引つ被かぶさつて今日こんにちまで残つていたものではないか。犯人が絶対に予期しなかつた……同時に警

察にも新聞記者にも気付かれなかつた偶然の結果が、今日に到つて、吾輩の眼の前に正体を暴露しているのではないか。

……占めた……名探偵名探偵。何という幸先のいい発見だろう……これは……。

……神は正直の頭に宿るだ。吾輩の投げた一錢玉に八幡様が引かなかつたらしい……。

……モウ他には無いか……スバラシイ手懸りは……。

吾輩は暗い空屋の中で朗らかになりかけて来た。すこし注意力を緊張さえすれば名探偵になるのは造作もない事だ……なんかとタツタ一人で増長しいしい消えたバットに火を点けた。悠々たる態度でその血の痕跡と、上り框の關係を見較べた。

被害者の右脇に在る鉄槌かなづちを右手で（犯人を右利きと仮定して）取上げて、老爺おやじの頭を喰らわせるのに都合のいい位置を考え考え、上り框に腰を掛け直してみた結果、老爺の右手の二尺ばかり離れた処が丁度いいと思つた。

吾輩……すなわち犯人は、おやじがどこかへ現金を溜めている事を人の噂か何かで知つている。だから家内の様子を見定めるつもりで……泥棒に這入る瀬踏みのつもりで、夜遅く、老爺がタツタ一人で寝ているところを、近所へ気取けどられないように呼び起して、取りあえず上等の下駄を買つて、上等の鼻緒をスゲさせている……つもりになつてみる。そう

して正直者の老爺が一生懸命に仕事をしている隙に、煙草を吹かし吹かしジロジロとそこいらを見廻していたであろう犯人の態度を真似てみる。つまり一廉ひとかどの名探偵を学んだ独ひとりしばい芝居であるが、やってみると何となく鬼氣が身に迫るような気がする。そのうちに、フト頭の上の半分割れた電燈の笠を見上げたトタンに我輩は又、一つの素晴らしいインスピレーションにぶつかった。犯人のその時の心理状態がわかったように思ったので、吾ながらゾーツとさせられた。

その電燈の位置と、血の痕跡あとの位置とを見比べて、老爺が仕事をしている状態を想像すると、ちょうど電燈の真下の処に老爺の禿はげ頭あたまが来る事になる。デンキとデンキの鉢合わせだ。嘸さぞテカテカと光っていた事であろう。

近所隣家となりは寝鎮ねしずまった、深夜の淋しい横町である。ほかには誰も居ない空屋同然の家の中で、両切りようぎりを吹かしながらその禿頭を睨んでいた犯人の気持は誰しも想像出来るであろう。そこへ何も知らない老爺が、鼻緒を引締めるために、力を入れながら前屈みになる。テカテカ頭を電燈の下にニユーと突き出す。トタンに使い終った重たい鉄槌かなづちを無意識に、犯人の鼻の先へゴロリと投出す。

……これじゃ殴らない方が間違っている。何の気も無い人間でもチョツトの間……今だ

……という気になるだろう。笑っちゃいけない。そんな千載の一遇のチャンスにぶつかれば吾輩だつて遣る気にならないとは限らない。禿頭と鉄鎚の誘惑に引っかからないとは限らない。人間の犯罪心理というものはソナところから起るものだ。つまりこの事件はホノ一刹那に閃めいた犯罪心理が、ホノ一刹那に実現されたものに過ぎないのではないか……という事実が考えられ得る。両切を吸口無しで吸ったり、上等の下駄を穿いたりするインテリならば……殊に虚無主義的な近代の、文化思想にカブレた意志の弱い人間ならば尚更、文句なしに、そうしたヒステリー式な犯罪をやりかねないであろう可能性がある。

吾輩はズット以前、借金取とりのがれの隙潰ひまつぶしに警視庁の図書室に潜り込んで、刑事関係の研究材誌を読んだ事がある。その時に何とかいう仏蘭西フランスの犯罪学博士の論文の翻訳の中に出ていた「純粹犯罪」という名称を思い出した。犯罪に純粹もヘチマも在ったものではないが、つまり何の目的も無しに、殺してみたくなくなったから殺した、盗んでみたくなくなったから万引したという、ホントウの慾得を忘れた犯罪心理……生一本きいっぽんの出来心から起った犯罪を純粹犯罪というのだそうで、この種の犯罪は世の中が開けて来るに連れて殖ふえて来るものである。如何なる名探偵いへどと雖も、絶対に齒を立て得ない迷宮事件の核心を作るものは、外ならぬこの「純粹犯罪心理」……とか何とか仰々ぎやうぎやうしく吹き立ててあつた。……

まさかソレ程の素晴らしい、尖端的なハイカラ犯罪が、勿体なくも八幡宮のお膝下に住居する仏惣兵衛の、正直の頭に宿ろう等とは思われないが、しかし現場から感じた吾輩のインスピレーションの正体は、突飛でも何でも、たしかにソレなんだから止むを得ない。つまりところ全くの初心者偶然に演出した迷宮事件の傑作としか思えないのだから止むを得ない。

だから犯人はアトで自分の犯した罪の現場の物凄さに仰天して狼狽して逃出したのではないか。だから犯人のアタリが全然付かないまま事件が迷宮に這入ってしまったのではないか。論より証拠……そう考えて来ると万事都合よく辻褁が合って来るではないか。あらゆる材料が必然的に絶対の迷宮に行詰って来るではないか。

……ナアンダイ……。

迷宮を破りに来て、迷宮を裏書きしていれば世話はない。

……どうも驚いた。最初には目的無しの犯罪は無いと断定していた吾輩のアタマが、物の一時間と経たない中に今度は、正反対の断定を下している。そうした事実を物語る厳然たる事実を認めて面喰っている。……どうも驚いた……。

金箔付の迷探偵が一人出来上った。八幡様の一銭がチツト利き過ぎたかな。それとも

名探偵のアタマが少々冴え過ぎたかな……と思ひ思ひ吾輩は縁日物の中折なかおれを脱いで、東京以来のモジャモジャ頭を掻き廻わした。同時にムウツとする程の頭垢ふけの大群が、天窓の光線に輝やきながら頭の周囲に渦巻いた。

いけないいけない。コンナに逆上のぼせ上つては駄目だ。気を急せかしては駄目だ。一つ頭髪あたまでも刈直かりなおして、サツパリとしてからモウ一度、ここへ来て考え直してみるかな。

吾輩は表の戸口をソツと開いて横町の通りへ出た。

すぐ隣家となりの、新しい理髪屋とこやの表の硝子障子ガラスを、ガラガラと開いた。

「いらつしやいまし」

という女みたような優しい声が聞こえた。火鉢の横に腰をかけて、長羅宇ながらうの真鍮煙管きせるで一服吸っていた、若い親方が、直ぐに立つて来た。

吾輩は一瞬間ポカンとなった。トテモ福岡みたいな田舎に居そうにもない歌舞伎おやまの女形みたいな色男が、イキナリ吾輩の鼻の先にブラ下がったので……。

吾輩も色男ぶりに於ては、東京初下はつくだりの自信をすくなくからず持っているつもりであるが、残念ながらこの若い親方にはトテモ敵かなわないと思った。

一軒隣りの荒物屋のお神さんが移転ひっこすのを考えているというのも無理はないと思った。

芝居の丹次郎と、久松と、十次郎を向うに廻わしてもヒケは取りそうにないノツペリ面が、頬紅、口紅をさしているのじゃないかと思われるくらいホンノリと色つぽい。それが油氣抜きの頭髮あたまにアイロンをかけてフツクリと七三に分けている。

白い筒袖の仕事着を引掛けているから着物の柄はわからないが、垢の附かない五日市の襟をキュツと繕って、白い薄ツペラな素足に、八幡黒やはたぐろの雪駄せつたを前半まえはんに突かけている。江戸前のシャンだ。二十七八の出来盛りさかだ。これ程の男前の氣取屋きとりやが、コンナ片田舎のチャチな床屋くすに燻くすぼり返っている。……おかしいな……妙だな……と男ながら惚れ惚れと鏡越しに見惚みとれているうちに、若い親方は、吾輩の首の周圍まわりに白い布片きれをパツと拵きげた。

「お刈りになりますので……」

と前こごみになって吾輩の顔を覗き込む拍子に、その白い仕事着の懷中ふところから、何ともいえない芳香がホンノリと仄ほのめき出た。

馬鹿馬鹿しい話だが吾輩の胸がチツトばかりドキドキした。……江戸ツ子に似合わないイヤ味な野郎だな……とアトからやつと氣が付いた位だ。

「失礼ですが旦那、東京の方で……」

若い親方が吾輩の首の附根の処でチヨキチヨキと鋏はさみを鳴らし初めた。

「ウン。これでも江戸ツ子のつもりだがね」

「東京はドチラ様で入らっしゃいますか」

少々言葉付きが変態である。江戸前の発音とアクセントには相違ないが、語呂が男とも女とも付かない中途半端だ。しかし愛嬌者と聞いたから一つ話相手になってやろうか……気分の変換は無駄話に限る……事によると隣家となりの迷宮事件のヒントになる事を聞き出すかも知れない……と気が付いたから出来るだけ気軽く喋舌しゃべり初めた。

「東京だつてどこで生れたか知らねえんだ。方々に居たもんだから……親代々の山ツ子だからね」

「恐れ入ります」

「君も東京かい」

「へエ……」

と云つたが言葉尻が聊いささか濁つた。

「いい腕じゃないか。鋏が冴えてるぜ。下町で仕込んだのかい」

「へエ……」

と又言葉尻が薄暗くなる。愛嬌者だというのに、どうも、おかしい男だ。東京を怖がつ

ているような言葉尻の濁し方だ。多分東京で色事か何かで縮尻しゅくじつて落ちぶれて来たんだろ
う。東京と聞くとゾツとするような思い出があるんだろう。

「どうしてコンナ処へ流れて来たんだい。それくれえの腕があればあ、東京だつて一人前じ
やないか。ええ？……」

「そんなでも御座んせん」

「ごんせん」がイヤに「ごんせん」摺ずれがして甘ったるい。寄席よせ芸人か、幫間たいこまちか、
長唄つづみ鼓の望月もちづき一派か……といった塩梅あんばいだ。何にしてもコンナ片田舎で、洗練された江
戸弁を相手に、洗練された鋏の音を聞いているともうタマラなく胸が一パイになる。眼を
閉じていると東京に帰ったようななつかしい気がする。

「どうだい。東京が懐かしいだろう」

「……………」

今度は全然返事をしない。よつぽど気の弱い男と見える。

「ずいぶん掛かるだろうなあ。コレ位の造作ぞうさくで理髪屋とこやを一軒開くとなると……ええ？…

…

「……………」

話頭はなしを変えてみたが、依然として返事をしない。眼を開いて鏡の中を見ると、真青になったまま、婆ばあじみた、泣きそうな笑い顔をしいしい首を縮めて鉢はちを使っている。鏡越しに顔を見られたので、仕方なしに作った笑顔らしかった。

「ヘエ。すこしばかり……山が当りましたので……」

とシドロモドロの気味合いで答えた。まるで警察へ行つて答えるような言葉遣いだ。……どうも怪訝おかしい。とにかく一種変テコな神経を持った男に違いない……と思った。それでも頭髪あたまはナカナカ上手に刈れている。吾輩の薄い両鬢りょうびんに附けた丸味など特に気に入った。巾着きんちやくきり切かテキ屋みたいに安っぽい吾輩の顔の造作が、お蔭で華族の若様みたいなフツクリした感じに変わって来たから不思議だ。

「山が当たつたつて相場でも遣つたのかい」

「……ヘエ……まあ。そんなところで」

若い親方の返事がイヨイヨ苦しそうである。吾輩は又、話頭はなしを変えた。

「隣うちりの家ねえ」

「ヘエツ……」

トタンに若い親方の顔が、鏡の中でサツと変つた。鉢を動かす手がピッタリと止まった。

ヨクヨク臆病な男と見える。そんなに覺える位なら、そんな恐怖い家の近くへ来なけあい
いにと思つた。

「実はねえ。あの隣家の屋敷を買いだと思つて、今日覗いて来たんだがね。持主は誰だ
い……今のところ」

「……へエ……あれはねえ……」

若い親方の顔色が、見る見る柔らいで来た。肩の下と両頬に赤味がポーツと復活して来
る中に鋏がチャキチャキと動き出した。

「あれはですねえ。今ところあの一木つてえお爺さんの後家さんのものになっているん
ですがねえ。実はあつし頼まれているんですけども……」

「フウン。心安いのかい後家さんと……」

若い親方の顔が急に苦々しい、虫唾の走りそうな恰好に歪んだ。同時にその背がスーッ
と切れ上つて、云い知れぬ殺氣を帯びた悪党面に変つた。

「いいえ。……その……別にソナ訳じやありませんけど、あの後家さんがツイこの間来
ましてね。呉々もよろしく……買手があつたら安く売りますからつてね」

「フウン。君はそれじゃ、古くからここに居たんだね」

親方は白い眼尻でジロリと吾輩の顔を見た。不愉快そうに答えた。

「いいえ。ツイこの頃ここに來たんですけどう」

「いつからだい……」

ここまで尋ねて来るうちに吾輩はヤツト気が付いた。どうも最前からの話ぶりが陰氣臭い。怪訝おかしい怪訝おかしいと思つたが、この男の過去には何か暗いところがあるらしい。おまけに被害者の後家さんと懇意らしいところをみると、これは何かしら大きな手がかりになるかも知れない。相場が当つた……とか何とか云っているがヒョツとすると……そう思うと吾輩の胸が又も、別の意味でドキンドキンとした。

しかし……それにしても迂濶うっかりした事は尋ねられない。何しろ相手は腕の冴えた職人に在り勝ちな一種特別の神経の持主だ。虫も殺さない優しい顔を一瞬間に老人の顔から、悪党面づらへとクラリクラリ変化させる位カンの強い人間だから、万一、この男が事件に関係を持っているとすれば、既に今まで尋ねた事柄だけでも、尋ね過ぎる位、手厳しく突込んである筈だ。身に覚えのある人間なら、余程の自信が無い限り、トツクの昔に感付いている筈だ。

沉いんやその当の相手は、現在ドキドキと磨とぎ澄とました大型の西洋剃刀かみそりを持って、吾輩

の咽喉の処を、ゾリゾリやっている。もしもこの男が、所謂「純粹犯罪」を遣りかねない種類の脳髓の持主で、吾輩に感付かれたと感付くと同時に、今が絶好のチャンスだ……気が付いたら最後、吾輩のグリグリの処あたりをブツツリと遣らないとは限らないだろう。

そうなつたら羽束友一、生年二十四歳……アアもスウもない運の尽きだろう。途中で警察の世話にならないように……と山羊髯が云つたのは、もしかするとこの事かも知れないぞ……人通りの無い淋しい横町だし、店には誰も居ないのだから……。そう気が付くと同時に吾輩は今一度、念入りにゾツとさせられた。名探偵生命がけの冒険とはこの事だと気が付いた。左右のお臀の下が一面にザラザラと粟立つたような気がした。

……しかし……と思ひ直しながら、吾輩は咳払いを一つした。若い親方がビツクリして剃刀を引つこめた。

男は度胸だ。かよい女だつて荒波に潜つて真珠を稼ぐ世の中だ。オマンマに有付くか、付かないかの境い目だ。行くところまで行つてみる。こちで気を付けて用心をしていたら、万一の場合でも怪我ぐらいで済むだろう。況んや相手は蔭間みたいなヘナヘナ男じゃないか。柔道こそ知らないが、スワとなつたら、銀座界限でチツトばかり嫌がられて来たチヨボ一だ。どうなるものか……と少々時代附きの覚悟を咄嗟の間にきめた。同時に、上

等の廻転椅子に長くなって、シャボンの泡を頬ペタにくっ付けながら決死の覚悟をしている自分自身が可笑しくなったので、又一つ咳払いをした。不意を打たれた親方が又ビツクリして手を離れた。

「いつからここに引越して来たんだい」

「へエ。アト月つきの末からなんで……」

親方の返事は何気もなさそうだったが吾輩は取りあえず腹の中で凱歌をあげた。アト月の末といったら、ちょうど事件のホトボリが醒めかかった時分である。それなのに被害者の後家さんと識しり合いというのは、いよいよ怪しい。

「繁昌してるってね」

とウツカリ口を迂すべらしてハツとした。近所の噂を探って来た事を疑われやしないかと思つて……。しかし親方の返事は依然として何気もなかった。

「へエ……お蔭様で……」

「隣の家には火の玉が出るってえじゃないか」

「へエ……そ……そ……そんな噂で……」

「君。這入ってみたかい。隣の家……」

「……いいえ。と……飛んでもない……」

「今時そんな馬鹿な話があるもんじゃない。ねえ親方……」

「まったくなんで。永らく空いてるもんですからね。そんな事を云うんでしょう」

「ウン。是非買いたいんだが、どうだい。坪十円ぐらいじゃどうだい。裏庭を入れて百坪ぐらいは有るだろう」

「そんなには御座んせん。六十五坪やつとなんで。裏庭の半分は他所よそのなんで……」

「向うの駄菓子屋のかね」

「そうなんで……十円の六十五坪の六百五十円……じゃチョット後家さんが手離さないでしよ。建物を突込んで千円位でなくちや」

「坪当り十六円か。安くないなあ」

「相場だと二十四五円のところですが」

「しかし八釜やかましい曰いわく附の処だからな」

「旦那は御存じなんで……」

「知つてるとも……迷宮事件だろう……怨みの火の玉が出るってな無理もないやね」

吾輩の頸動脈の処から親方がソツと剃刀を引いた。頬を青白く緊張さしてゴックリと唾つ

液を嘔み込んだ。

吾輩は少々面白くなつて来た。どうもこれが悪い癖なんだが……。

「ねえ。そうだろう。何の罪も無い、ただお金をポチポチ溜めて、お神さんを養生させるだけが楽しみといったような仏性のお爺さんが、怨みも何も無い、思いがけない人間から、思いがけない非道い殺され方をしたんだからね。殺されたツ……と思った一刹那の一念は、後を引くつてえじゃないか」

親方が何気なく、剃刀を磨ぎに行つた。吾輩は追いかけるように振返つて問うた。

「君はドウ思うね。この犯人は……」

「……………」

親方は吾輩の質問を剃刀を磨ぐ音に紛らして返事をしなかった。しかしその一心に剃刀を磨ぐ振りをしている色悪ジミた横頬の冴えよう。……人間の顔というものは、心の置き方一つでこうも変わるものかと思ひながら鏡越しに凝視していた。そのうちに剃刀を磨ぎ澄まして神経を落付けて来たらしい親方が、さり気なく吾輩の背後に立ち廻わつて剃刀を構えた。淋しい淋しい微笑を薄い唇に浮かべた。

吾輩は白い布片の下で全身を緊張さした。両の拳を握り固めて、無念流の棄て構え……

といった恰好に身構えたが、白い布片を剥くつたら、虚空を掴んで死にかけている人間の恰好に似ていたろう。コンナに真剣な気持で顔の手入れをしてもらった事は生れて初めてだ。

「モミ上あげは短かく致しましょうか」

「普通あたりまえにしてくれ給え。短かいのは亜米利加アメリカ帰りみたいでいけない」

「かしこまりました」

「僕は絶対に迷宮事件だと思うね。犯行の目的がわからないし、盗まれた品物も無い。女房は評判の堅造かたぞうで病身、本人も評判の仏性で、嚙孝行かかあの耄碌もうろく爺おやじとなれあ、疑いをはけるところはどこにも無いだろう。要するにこれは何でもない突発事件だと思うね」

「ヘエ。突発事件……と……申しますと……」

「つまりこの犯人は、いい加減な通りがかりの奴で、最初から被害者を殺す量見なんか毛頭無かったんだ。仏惣兵衛の老爺おやじがどこかに現金を溜め込んでいる位の事を、人の噂か何かで知っている程度の奴が、何の気も無く這入って来て、下駄あつちを逃えながらそこいらを見まわしているうちに、フィツと殺す気になったんじゃないかと思うんだがね。これで殴ってくれといわんばかりに鉄鎚かなづちを眼の前に投出して、電燈の下に赤いマン丸い頭をニユツ

と突出したもんだから、ツイフラフラッとその鉄鎚を引掴んで……」

「……………」

耳の附根の処をゾキゾキやっていた剃刀の音がモウ一度ソツと離れ退いた。同時に吾輩のお尻から両股^{もも}にかけてゾーツと粟立つて来た。見ると若い親方は、眼を真白くなる程^{みは}瞠^{みは}つて、鏡の中の吾輩の顔を凝視している。ピリピリと動く細い眉。キリキリと冴え上った^{めじりゆがひきつ}皆。歪^{ひが}み瘻^{ひきつ}つた唇。……吾輩の耳の蔭でワナワナと震える剃刀……。

……これは不可^いけない。大シクジリだ。何とかしてこの親方を安心させて、気を落付かせなければいけない。葉がチツト利き過ぎるようだ。このまま表へ飛出して行衛^{ゆくえ}を晦^{くら}まされたりしては面倒だ。

「アハアハアハ。どうだい親方。驚いたかい。俺あタツタ今行つて現^{げんじょう}場の模様を見て考えて来たんだ。何一つ盗まれていない原因もハッキリとわかったんだ。殺^やつてしまつてから急に恐ろしくなつて逃げ出したものに違いないんだからね」

「……………」

「つまりアンナ空屋の中にタツタ一人で住んでいた禿頭^{おやじ}の老爺^{おやじ}が悪いという事になるんだ。迷宮事件を作るために居たようなもんだ。ねえ君。そうだろう……僕は犯人に同情するよ」

「そうですか……ネエ……ヘエ——ッ」

と若い親方が五尺ばかりの長さの溜息を吐いた。衷心ちゆうしんから感心してしまったかのよう……。

「……おどろきましたねえ。旦那のアタマの良いのには……」

「ナアニ。外国の犯罪記録を調べてみるとコレ位の事件はザラに出て来るよ。山の中の別荘で寝しなに、可愛がつて頂戴と云った女を急に殺してみたくなったり、霧の深い晩に人を撃つてみたくなってピストルを懐ふところにして出かけたりするのと、おんなじ犯罪の愛好心理だ。所謂いわゆる、純粹犯罪というのとおんなじ心理状態が、この事件の核心になっていると思うんだ。そんな人間が都会に住んでいる頭のいい学者とか、腕の冴えた技術家とかいうものの中からヒョイヒョイ飛出す事がある……と横文字の本に書いてあるんだ。つまり文化意識の行き詰まりから生まれた野蠻心理だね」

「ヘエエ。なかなか難解むずかしいもんで御座いますね」

親方の剃刀が、微かな溜息と一緒に吾輩の襟筋で動き出した。同時に吾輩も心の中でホツとした。生命いのちがけの冒険が終局に近付いて来たらしいので……。

「日本の警察なんかじゃ、そんなハイカラな犯罪がある事を知らないもんだから、犯罪と

云やあ、金か女かを目的としたものに限っているように思つて、その方から探りを入れようとするんだ。だからコンナ事件にぶつかる^{かいもく}と皆目、見当が附かないんだよ」

「へエ。警察では、その目的つて奴を、まだ嗅ぎ付けていないんでしょうか」

「いないとも……浮浪人狩なんか遣つているところを見ると、この事件の性質なんか全然^{てんで}問題にしないで、見当違いの当てズッポーばかり遣つていらしいんだね。そうしてこの頃ではモウすっかり諦らめて投出しているらしいね。だからこの犯人は捕まりつこないよ。絶対永久の迷宮事件になつて残るものと僕は思うね」

「へエ。どうしてソンナ事まで御存じなんで……」

吾輩はヒヤリとした。そういう親方の声が妙に凶太く聞えたので、扱^{さて}は感付かれたかな……と内心狼狽したが、色にも出さないまま、眼を閉じて言葉を続けた。

「ナアニ。僕はソンナ事を研究するのが好きだからさ。だからあの空屋^{あきや}を買つてみたくなつたんだよ。そんな犯罪事件のあつた遺跡^{あと}を買つて、落付いて調べてみると、意外な事実を発見する事があるんだからね。そんな山ツ子が僕の商売なんだがね」

「へえ——。うまく当りますかね」

親方がニヤニヤ冷笑しながら云つた。……吾輩の言葉の意味がわかつているのだ。犯人

の盗み忘れた金かねを探そうと目論もくろんでいる吾輩の氣持がわかったので冷笑しているのだ。その金かねがモウ無い事を知っているもんだから……。

吾輩は腹の中で二度目の凱歌をあげた。

「ウン。僕が狙った事件で外れた事件やっは今までに一つも無いよ。要するにこの頭一つが資本だかね。ハツハツハツ」

「へエ。珍らしい御商売ですね」

親方が又コツソリ三尺ばかりの溜息を吐いた。吾輩のチャラッポコを信じて安心したらしい。吾輩も二尺五寸位の溜息をソツと洩らしながら椅子の中から起上った。

「お待遠さま……お洗せんいたしましょう」

サツパリと洗つて、いい氣持になつた吾輩が又、椅子に腰をかけると、親方が新しいタオルで拭き上げて、上等のクリームを塗つて、巧みにマツサージをしてくれた。

「……こんにちは……御免なさせ……」

「入いらつしやい」

新しい客が来た。ここいらの安見番やすけんばんの芸者らしい。但、着物の着附だけが芸者と思えるだけで、かんじんの中味はヨークシャ豚の頭に、十錢ぐらいのかしわの竹の皮包みを載

つけた恰好だ。そいつが腐りつきそうな秋波を親方に送った序に吾輩をジロリと睨みながら、吾輩がタツタ今立上った椅子の座布団の中へドシンと巨大な大道白おおいを落し込んだ。愛想あいそもコソもあつたもんじやない。

「イヤ。お蔭でサツパリした。ところでどうだい。今の地面の話は……モウ少し歩み寄つてもいいんだが……。決して君を跣足はだしにしやしないが、先方はどこに居るんだい」

「ヘエ。これはモウ……何でも門司の親類の処に居るんだそうですが、時々八幡様を拝みかたがた様子を聞きますんで。モウ今日あたり来る頃と思うんですが。二三日中に来るつてえ手紙が、二三日前に参りましたんで……」

「ヘヘッ。お安くないね。うまく遣つてるじやないか一木の後家さんと……」

「じよ……じよ……じようだん……」

と親方は何かしら顔色を変えながら芸者の方をチラリと見た。しかし吾輩は何も気付かなかつた。背後を振向いた時には、大きなお尻を振り振り、表口を邪慳じゃけんに開けて出て行く、豚芸者の後姿が見えた。……何という変な芸者だ。そんなに待たせもしないのに……と思っただけであつた。

そのサツサと帰つて行く後姿を見送りながら、苦々しい表情で瀬戸火鉢の前に腰を卸し

て、長羅^{ながらう}宇で一服しかけた親方は、何気なく吾輩が差出したバツトの箱を受取つてチョツト押し頂きながら一本引出した。慣れた手附で、火鉢の縁へ縦にタタキ付けて、巻^{まき}を柔らかくしながら吸い付けた。

「吸口はまだ這入っているぜ……君……」

「ヘエ。どうも済みません。……わつしやドウモこの吸口の蠟^{ろう}の臭いが嫌いなんで……へへ……有難う存じます。只今お釣^{つり}銭を……あ……どうも相済みません。お粗末様で……」

吾輩は、五十銭玉を一個、若い親方の手に握らせて表へ出た。ブラリブラリと歩き出しながら町角を右へ曲ると、急に悪夢から醒めたように火見櫓^{ひのみやぐら}の方向へ急いだ。

翌る朝、玄洋日報の第三面に特号四段抜の大記事が出た。

「筥崎の迷宮事件……下駄屋^{ごしろし}殺犯人捕わる……隣家^{となり}の理髪店主……端緒は現場の吸殻から……」云々と……。

記事は面倒臭いから略するが、犯人の理髪屋の若親方甘川吉之介（三十）と、昨日^{きのう}の正午過ぎに、偶然に訪ねて来た被害者、仏惣兵衛の後家さんチカ（五二）が、筥崎署へ引っぱられると同時にスツカリ泥を吐いてしまった。

後家のお近婆さんは共犯ではなかったが、しかし犯行の動機は婆さんの不謹慎から生み出されたものに相違なかった。

お近婆さんは評判の通りの堅造^{かたぞう}であつた。結婚勿々から病身のために亭主と離れ離れになつていたせいであつたろう。五十を越しても生娘^{きむすめ}のように肌を見せるのを嫌がつたので、行く先々の鍼灸^{はりきゅう}治療師が困らせられる事が多かつた。同じ治療を受けに来ている患者達の間で浮いた話が始めると、すぐに席を外すくらい物堅い女であつた。

ところが俗に魔がさしたとでもいうのである。伊勢の天鈴堂^{てんれいどう}という大流行の灸点^{きゅうてん}師^しの合宿所の共同風呂で、東京から神経痛を治療しに来ている理髪職人の甘川吉之介とタツタ一度、あやまつて一所に入浴して以来、スツカリ吉之介に迷い込んでしまつて、治療をソツチ退け^のにして、名所名所を浮かれ廻^{うち}わつている中に、亭主の惣兵衛が生前、長年の間、五十銭銀貨ばかりをコツソリとどこかへ溜め込んでいる事実を、何の気もなく喋舌^{しゃべ}つてしまつた。

これを聞いた吉之介は、東京で色々な女を引っかけ飽きた揚句^{あげく}、親方の女房と情死をし損ねて、新聞に色魔と書かれたので一縮^{ひとぢぢ}みになつて逃げて来た男であつた。所謂^{いわゆる}、江戸ツ子の喰詰めで、旅先へ出ると木から落ちた猿同然の心理状態に陥っている矢先であつ

た。溺れた者が藁でも掴む気で、お近婆さんの好意に甘えていたもので、今ではもうウンザリしかけているところへ、この話を聞かされたので、何の事はない五十銭銀貨の山を目当てにフラフラと九州へ来て、フラフラと八幡宮横の惣兵衛の家を探し当てて、フラフラと惣兵衛を呼び立て下駄を誂えたものであった。だから惣兵衛の横に腰をかけてバツトを一服吸い付ける迄の吉之介には、殺意なんか無論、無かった。その五十銭銀貨の山を盗み取る気さえ無かったという。

むろん警察ではソナ申立ては絶対に信じなかった。無理遣りに計画的な犯罪として調書を作り上げて検事局へ廻わしたもので、新聞記事もその調書の通りに書いておいたが、それでも後家のお近婆さんだけは目玉を喰っただけで無罪放免をされた。つまりこの後家さんとの事件に対する関係は、山羊髭編輯長と、警察の見込との双方ともが適中して、双方とも外れていた訳である。

その以外の事実は全部名探偵……すなわち吾輩の推量通りであった。

元来が荒事に慣れない、無類の臆病者の吉之介は兇行後、現場の恐ろしさに慄え上がって一旦は逃げ出して附近の安宿に泊った。しかし、それから又、五十銭銀貨の事を思い出したので、翌る晩の真夜中から、一生懸命の思いで、人目を忍んで、空屋に這入っ

て懷中電燈の光りで探しまわった結果、やっと三晩目に台所の漬物桶の底から、真黒になつた銀貨二千余円を発見するとスツカリ大胆になつてしまった。その金を稀塩酸で磨いて、紙の棒に包んだのを資金として、故意と直ぐの隣家に理髪店を開いていたところは立派な悪党であつた。こうしていれば誰にも判明る氣遣いは無いと、安心して切つていたものであつた。だから後家さんが帰つて来てから自分に疑いをかけて、何度も何度も詰問しに来たけれども都合よくあしらつて、知らん顔をしていたという。その大胆不敵さには箱崎署も舌を捲いていた。

発覺の端緒は現場に捨てて在つた両切の煙草であつた。斯様な微細な点に着眼して、附近に住む両切煙草の使用者を片端から調べ上げた箱崎署の根氣と苦心は実に慘憺たるものあり……云々という記事であつたが、この最後の文句を書き添えた吾輩の文章の苦心が、如何に慘憺たるものがあるかを知っている者は我が山羊髯編輯長だけであろう。それはいいが、その記事の終尾の処に次のような記事がデカデカと一号標題で掲載されていたのには驚いた。

密告者は芸妓だ

女の一念は恐ろしい

Ⅱ 犯人の第二告白Ⅱ

箱崎署員の談によると、犯人は発覚の端緒を箱崎見番の芸妓某の密告と認めているらしい。犯人の告白に依ると該箱崎見番の芸妓某は犯人の男振りに夢中になり、毎日のように客足の絶えた頃を見計らつて犯人の処へ顔を剃りに来たもので、その都度、お前と下駄屋の後家さんとは兼ねてから懇意ではないかと念を押すので、犯人は知らぬ知らぬの一点張りで追払つていた。ところへ昨日、隣家の地面の事に就いて、後家さんとの交渉取次を犯人に希望する客人が来たので、後家さんが時々来る旨を迂濶うっかり、お客に話したのを、例の通り顔剃りに来た芸妓が耳にするや憤然として理髪店を出て行つたが、彼の女が、憤慨の余り後家さんとの関係を箱崎署へ密告したものに相違ない。女の一念ぐらい恐ろしいものはありませぬ。私は元来無類飛切とびきりの臆病者の神経屋ですから、人殺しをしてからというものは、あらん限り氣を付けて、万に一つも手落ちの無いように心掛けていたのですが……と犯人は繰返し繰返し戦慄している。

後家を殺して

高飛びの計画

Ⅱ犯人の第三告白Ⅱ

犯人は箱崎署の厳重な取調べに包み切れず、次のような恐ろしい犯行の予定計画を白状した。

恐れ入りました。私の人殺しの真実の動機を教えてくださいましたものはあの後家さんです。ですからあの後家さんが生きている間は、枕を高くして寝る事が出来ません。現に後家さんは私を疑って、時々そんな口ぶりを洩らしている位ですから、後家さんから頼まれている地面の売れ次第、その金を捲上げて、後家さんの口を閉いで、高飛びするつもりでした。

どうせ死刑になるんなら何も彼も申上げて死にます。御手数をかけて済みません。云々。

吾輩は呆れた。驚いた。昨日、後家さんの話をした時に急に変わった理髪屋の親方の悪魔面を思い出して飛び上った。まるで名探偵の吾輩の行動を一から十までチャント見ていた

ような名記事だ……と思いいいその新聞を持って編輯室に押しかけて行つた。

安い弁当飯を頬張つて山羊髯をモクモクと動かしているおやじの鼻の先へ新聞記事を差付けて指した。

「この記事は誰が書いたんですか」

「ムフムフ。わしが……書いたがナ……」

と云い云い山羊髯にクツ付いた飯粒を掴んで口の中へ入れた。序に総入歯の下の段を鼻の先へ抓み出して白茶氣た舌の先でペロペロと嘗めまわした。

不愉快なおやじだな……と思つたが、それどころではなかった。

「……冗談じゃない。コンナ馬鹿な事を犯人が喋舌つたんですか」

「ムフムフ。第二の告白の方は昨日の夕方箱崎の署長が当社へ礼云いに來た。お蔭で、永い間の不名誉を回復しましたチウテナ。法学士出のホヤホヤの署長じゃが、学生上りの無邪氣な男でな。その序に何も彼も喋舌つて行きよりましたよ」

「第三の告白の方も署長が喋舌つたんですか」

「イイヤ。それはわしが署長に入れ智恵したことですわい。犯罪の定石ですからな。あの署長は無経験な正直者ですけにキツトわしが云うた通りに誘導訊問をしましょうて……」

「ヘエ……それじゃ、まだ実際に白状した訳じゃないんですね」

「……モウ今頃は白状しとりましょう。犯人もむろん後家さんと同棲する腹じゃないのじやから、将来の考えが頭の中でチグハグになつとるに違いない。それじやからどこかで返事をし損ねてキツト誘導訊問に落ち込んで来ますてや。たとい犯人が否定し通しても箱崎署から文句を云うて来る氣づかいはありません。君の手腕に恐れ入って感謝しとるのじやから……実はこの朝刊の記事がすこし足りませんでしたからな。アンタのお株をチョット拝借したまでじや……ヒツヒツ……」

「驚いた。生馬いきうまの眼を抜く以上だ」

「あんたが昨夜ゆうべの中に犯人と後家さんの写真を探して来とるとこの記事は満点じやつたが……」

吾輩は哑然となった。吾輩以上のモノスゴイ、インチキ記事の名人に、生れて初めてお眼にかかったので……。

真実百分の与太

今朝けさの玄洋日報紙を見ると社会面に一大事件が持上っている。

低い、うねりを打ったような丘陵続きの海岸に近く五艘ごそうの水雷駆逐艇が、重なり合って碇泊している。その横に三号活字でベタベタと「呉淞ウースンに着いた分捕ぶんどり、独逸潜水艇ドイツ」という説明が付いている。

「馬鹿ッ」と思わず口走りながら吾輩は、寢床の中から飛び起きた。「頓間とんま。間抜け。ト
ンチキ。これあ潜水艇じゃねえやい……何という恥曝はじさらしだ。これあ……」

大正の三四年頃だったか東京の某新聞社に居た時分に、桜島の大噴火、鹿児島市の大混乱と題して吉原の火事の写真を使ったことがある。その逃げ迷っている群集の足下に「吉原町」と一パイに書いた手提灯ちようちんが転っているのを、後から気が付いて冷汗を流した事があるがソレ以来の……イヤ、それ以上の大失敗だ。あんまりハッキリし過ぎているので

頬返しが付かない。^{ほおがえ}

間違いのソモソモは昨夜の午後四時頃の事だ。警察種^{だね}の記事を仕舞^{しま}って帰りかけようとしている吾輩の処へ、眼をシヨボシヨボさせながら山羊髯編輯長がスリ寄つて来た。

「君は写真の補筆が出来ますか」

断つておくがこの時の吾輩は最早^{もはや}、正式に入社していて、社長以下小使に到るまで顔が通っている。行く処、可ならざるなき吾輩の活躍ぶりに皆、舌を捲いているところだった。だから、もしやと思つて山羊髯がコンナ事を頼みに来たのだらう。吾輩がうなずいて見せると山羊髯がモウ一度、眼をシヨボシヨボさした。

「それではこれを一つ直してくれませんか。上^{シャンハイ}海 ○○新聞の切抜ですが。タテ二段ぐらゐに縮めます。向うの海岸の形が大切ですからね。ヒツヒツ」

受取つたのは極めて紙質の悪い新聞ザラに、目の荒いボヤけた六十線の銅版を、汚れたインキで印刷した切抜写真で、薄ボンヤリした雲みたような陸線のコチラ側に筏^{いかだ}みたような船が五艘かかっている。どうやら水雷艇らしい恰好だ。上海○○新聞というのは最低級の邦字新聞と聞いたが、成る程、汚い紙面だ……なぞと思ひ思い、給仕に十銭のチャイニーズ・ホワイトのチューブを買つて来さした。写真室に在る日本の水雷艇の写真と引合わ

せながら一生懸命に腕を揮^{ふる}つて、十銭の水彩顔料と、墨汁を塗りこくつた。ところで、それから今一度、山羊髯に見せればよかったのだが、早く帰リたかったものだから、

「銅版屋へ廻わしてもいいですか」

と怒鳴つたら朝刊の記事を直していた山羊髯が、手輕くうなずいた。そこで補筆価値百二十パーセントの堂々たる日章旗を翻した司令塔、信号マスト、水雷発射管、速射砲の設備整然たる五百噸^{トン}級、乃至二百噸^{ないし}級の水雷駆逐艇が五艘、九十線の銅版キメ細やかに浮き出しているとは夢にも知らずに、山羊髯が「分捕潜水艇」の標題を附けた版^{はん}下^{した}の寸法^{すんぽう}書^がきを印刷部へまわしたものだろう。

近頃大評判の独逸^{ドイツ}潜水艇の写真を、不思議に早く着いた上海〇〇新聞から切抜いて東京大阪の新聞をアツと云わせようという山羊髯の心算^{つもり}だったのだろう。

「飛んでもない事をした。この新聞が佐世保へ廻わつたらドンナに笑われるか……イヤ。大阪の新聞がドレ位腹を抱えるか。つまるところ、山羊髯と俺が同罪なんだ。チョツトした不注意だったのだが。イヤ。ヒドイヒドイ」

そう考えるとスツカリ眼が醒^さめてしまったが、何だか社に出るのが気まりが悪いような気がした。何とかして記事で正誤、訂正するか、取消しにする方法はないものかと考えた

が、生憎あいにくな事に写真ばかりは一度掲載したが最後、取返しが絶対につかない事を感じた。

弱ったな……と悲観しているところへ下宿の女将かみさんが、梯子段の下から顔を出した。

「羽束さん。もうお眼醒めだすな」

その櫛くし巻まきの肥ふつちよう面づらを見ると思い出した。この女将かみさんは吾輩に度々特種を提供している。

……巡礼婆げんぽあの行倒おれ……

……近所のドクトルの淋病……

……タキシ―屋の幽霊……

……町内の標札の紛失……

なぞ、なかなか面白いが、今朝けさも何か、そんなニュースが這入はいったらしい。吾輩は頭のフケを狂人きちがいのように掻きまわしながら起上った。

「何ですか。お神かみさん。又事件ですかい」

女将かみさんは返事をする準備として、とりあえず取って付けたように魘おびえた顔をした。この辺には珍らしく眉を剃って鉄漿おはぐろをつけているからトテモ珍妙だ。

「ヘエ。アナタ。向家の煙草屋の二階だす。あの二階に下宿して御座った別嬪さんなあ！」

「ウン。知ってるよ。二十二三の……」

「ヘエ。アナタ。あの人がカルモチンとかで自殺して御座るちうてアナタ……今朝……」

話の終らないうちに吾輩は猿股一つになって立上った。顔も何も洗わないまま洋服に手足を突込んでしまった。スウエターに首を突込んで、靴下を穿いて、帽子を引っ掴むと、梯子段の途中に引つかかっている女将の巨体を飛び越すようにして上り框から半靴を突かけると表の往来……千代町の電車通りに飛出した。

「まあ。早さなあ。消防のごたる」

と女将が感心している間に、モウ五六人、人だかりのしている向家の煙草屋に駈込んだ。

いつも煙草を買うので新聞記者という事を知っていたのであろう。野次馬に覗かれないように表の板戸を叩きかけていた博奕打の藤六という宿屋の親仁がヒョコリと頭を下げ通してくれた。こつちも頭を下げながら出会い頭に問うた。

「どうしたんですか」

親仁は妙に笑いながら表の戸をピツタリと閉め切った。上り框に腰をかけて声を潜めた。

二階の女は此村ヨリ子という別嬪で二个月前から下宿している。毎日十時頃に起き

て、朝湯に這入って、念入りにお化粧をしてから十二時頃飯を食う。それから午後の三時頃になつて綺麗に着飾つてどこかへ出かけて、夜の十一時か十二時頃歸つて来て、自分で表の入口の締りをして寝るだけが仕事で、宿主の方ではまことに手数がかからない。下宿料もキッチンキッチンと入れる。今朝はどこかへ奉公のお眼見得に行くのだから早く起してくれと云つて寝たが、十時頃まで起きないから、起しに行つてみると、イクラゆすぶつても眼を開けない。どうも様子が怪訝しいようだから、近所の医者を呼んで来て診てもらつたら、睡り薬を服み過ぎているらしい。自殺かも知れないという話。万一自殺となると身よりタヨリの事はヨリ子から一つも聞いていないし、第一何の商売だか全くわからないから、今も巡査に聞かれて困つたところだと云う。

「ナアンダイ。お爺さん。胡麻化しちやイケないぜ。大抵わかつてんだろ」

と一本啖らわしてやつたら親仁が禿頭を搔いた。

「エへへ。済みません。実は新聞に書かれちゃ困りますけに……レコだすけにな」
と小指を出して見せた。

「へエ。旦那は誰ですか」

親仁は又頭を搔いた。両手を膝に置いて頭を一つ下げた。

「そ……そいつは御勘弁下さい。……わたくしが、お世話しましたとですけに……」

「アハハ」と今度は吾輩が頭を搔いたが、親仁がちよつと両手を合わせて拝む真似をしたのを見ると可哀相になった。

「失敬失敬。それじゃ本人が死んだらスツカリ事情を話して下さいよ。決してこちらさんに御迷惑になるような事は書きませんから……」

親仁は苦笑して首肯うなずいた。その首肯き方で女の旦那というのはヨツポド大物らしいと思つた。

二階へ上つてみると六畳ばかりの床の間附の部屋の中央まんなかに、花模様のメリンスの布団を敷いて、半裸体の女が大の字に寝かしてある。

その枕元に近所の医者……下宿の女将おかみの報告に係る淋病のドクトルがタツタ一人坐つて胃洗滌をやっている。

金かなだら盃いの中を覗くとドロドロの飯粒と、糸蒟蒻いとこんにやくが漂っている中に白い錠剤みたようなもののフヤケたのがフワフワと浮いている。

患者は、

「ガワガワ……グルグル……ゴロゴロゴロ……」

と二重腮あごをシャクリながら嘔はいているが、そのまま手足を長々と投出しながらスヤスヤと睡ねむっている。

変テコな状態だが、まだ相当麻醉しているのであろう。

流行の庇ひさし髪がみに真物ほんものの真珠入の鼈甲櫛べっこうぐし、一重瞼まぶたの下膨しもぶくれ。年の頃は二十二三であらうか。

顔から肩から胸元……背中はわからないが手首、足首まで真白に化粧して頬紅、口紅をさしているが、その色つぽい事。正に熟うれ切った、女盛りの肉体美だ。

吾輩が上って行くと、ドクトル淋病氏が、ハツとしたらしい。

吾輩が女のおデコの上に名刺を置いて見せたらドク・リン氏が叮嚀に頭を下げたて説明してくれた。

好人物らしい微笑を浮かべて、

「私はタツタ今来たんです。広矢ひろやと申します。今朝早く、夜中に、かなり多量のカルモチンを嘔下えんかしたらしいですが、胃洗滌をやってみたに残りを出してしまいました。消化不良

らしいですから大抵助かるでしょう」

「警察から誰か来ましたか」

「千代町の派出所から巡査が一人来ておりましたが大丈夫助かると云つたら、そのまま帰つて行きました」

「成る程。死なない限り用は無いと思つたのでしよう」

と云ううちに吾輩は、そこいらを探しまわつたが、成る程遺書らしいものはどこにも無い。女の袂たもとから額縁の裏まで引っくり返してみたが、出て来たものは袂たもととホコリばかりだ。ただ机の曳出ひきだしから分厚い強度の近眼鏡と、カルモチンと同じ位のカスカラ錠の瓶を探し出しただけであつた。そんな物を探しているうち偶然に、机の前に投出してある女の足袋たびを踏付けると、踵かかとの処が馬鹿に固いのかかとに気が付いた。

覗いてみると、背が高く見えるように女が入れるファイニングゴムだ。

吾輩はソレを掴つまみ上げて広矢氏に見せた。

「この足袋は貴方あなたが脱えびがせたんですね」

広矢氏は海老えびのように赤くなつて弁解した。

「そうです。足が冷えると見えて、穿はいて寝てたんです。こんな場合には、全身の束縛を

解くのが、手当の第一ですからね」

そう云い云いドク・リン氏は新しい白襦袢しろじゅばんと、小浜の長襦袢をキチンと着せて、博多織の伊達巻を巻付けはじめた。

「アハハ。これあ自殺じやありませんぜ」

「エッ。どうして……わかりますか」

ドクトルが眼を丸くして振返った。

「カスカラ錠は下剤じやないですか」

「そうです。緩下剤かんげざいです」

「ドレぐらい服のめば利きますか」

「そうですね。人に依りますが少い時で×粒ぐらい。多い人は×××粒ぐらい用いましょうな」

「カルモチンをソレ位服のめば死にますか」

「死にませんなあ。ちようどコレ位の睡り加減でしょうなあ。人にもよりますが」

「この女は近眼ですね」

「どうしてわかります」

「ここに眼鏡があります。近眼だもんですからカスカラとカルモチンを間違えて服のですね。朝寝の人間には常習便秘が多いんですから……」

「……ハハア……」

と医者が感心してタメ息を吐いた。気味わるそうな顔をして吾輩を見上げた。

「まだ、なかなか醒めないでしょうね」

ドク・リン氏はうなずいた。……というよりも吾輩に圧倒されたように頭を下げた。

「何時間ぐらい睡^{ねむ}るでしょうか」

「わかりませんねえ。夕方までぐらい睡るかも知れません」

「助かりますか」

「大抵助かります」

「ハハア……そこところを一つ、まだ助かるか助からぬか、わからない事にして書きたいですが、含んでおいてくれませんか。そう書かないと新聞記事になりませんから……」

ドク・リン氏は眼をパチパチさせた。妙な顔をして不承不承にうなずいた。大して事実を偽る訳ではないし、吾輩に痛いところを見られているもんだから余儀なく承知したのだろう。

押入から布団をモウ一枚出して掛けてやりながら考えた。何とかして女の旦那を探し出す工夫は無いか。下宿の親仁は遊び人だから滅多に口を割る氣遣いが無いし、ドク・リン氏だつて知らないにきまつている。身のまわりのものに見当をつける品物も無いし、手紙なんかも在りそうにないし……ハテ。困つたな。相手の旦那を見付けて「彼女自殺の感想談」を一席弁じさせなくちや、記事にならないんだが……と頻りに首をひねっているところへ、下から煙草店に坐っている小娘が上つて来た。藤六の娘らしく鼻っ株が大きい。

「あの……お迎えの俵が参りましたが」

「誰をお迎えに……」

「此村さんをお迎えと申しまして……」

「どこから来たんだい」

「存じませんが……」

「お父^{とつ}つあんはどこへ行つたんだい」

「今ちよつとお電話をかけに……」

「立派な俵かい」

「ハイ。お抱えらしい御紋付の……」

「占めたつ」

と云うなり吾輩は、階子段を二股に飛び降りて靴を穿いた。表に出るなり俤夫に云った。
「急いで僕を、お邸まで乗せてつてくれ給え。此村さんが自殺してんだから」

面喰った俤屋が駈け出すと、吾輩は威勢よく仔熊の皮の中に反り返った。……ヘン。
どんなもんだい。これだから新聞記者が止められないんだ……と云いたいくらいだ。おまけにどこへ連れて行かれるんだかテンキリわからないんだからイヨイヨ以て痛快だ。

石堂橋を渡つて電車通を東中洲、西中洲を抜けて春吉へ曲り込んで、渡辺通りから郊外へ出たと思うと、驚ろく勿れ、九州の炭坑王と呼ばれた、安島子爵家の門内に走り込んだ。

流石の吾輩も……コレハ……と驚いた。何かの間違いじゃないかと思つたが、まさかに俤から飛降りて逃出す訳にも行かない。……ええ糞。どうでもなれ……と思つて玄関に立つと俤夫が呼鈴を押してくれた。出て来た小間使に名刺を渡して、案内さるるままに美事な応接間に通つた。まるでアラビヤン・ナイトだ。

どうも美事なのに驚いた。青豆色の天井。古黄金色の四壁。五色七彩の支那絨

氈。^{じやもんせき}蛇紋石の大暖炉。その上に掛かった英国風の大風景画。グラントピアノ。紫檀^{したん}の茶棚。^{らでん}螺鈿の大卓子。^{テーブル}ロココ風のクリスタル・シャンデリヤ。南洋材のキャビネット。黄緞^{きじんす}子の長椅子。^{ソファ}安樂椅子。^{イージイチエア}白麻ドロン・ウオークの窓掛などをキョロキョロと見まわしているうちに、フト傍^{そば}の飾戸棚^{キャビネット}の横に附いている小さな鏡の中に自分の顔を発見してギョツとした。頭髪^{あたま}がまるで煙突の掃除棒だ。おまけに眼鏡を忘れて来ている面付^{つらつき}のまづい事。分捕^{ぶんどり}スコップに洋服を着せたつてモウすこしは立派に見えるだろう。洗い直して来ようかしらんと思つて、洗面所らしい処を見まわしているうちに背後の扉が音もなく開いた。^あスバラシイ幻影が音もなく迂^{すべ}り込んで来て、しなやかに吾輩の前に立止まった。香水の匂いの棚^{うやうや}引く中に恭しく頭を下げた。

何という生地^{きじ}かわからぬ金線^{きんせん}入、刺繍裾模様^{きんしや}の訪問着に金紗^{きんしや}の黒紋付、水々しい大丸鬚^{おまるまげ}だ。上げた顔を見ると夢二式の大きな眼。小さな唇。卵型^{あこ}の腮。とても氣品のある貴婦人だ。年齢なんかわからない位だ。

吾輩は二重三重に面喰つて頭を下げた。

「僕は……私は……只今名刺を差上げました玄洋日報社の羽束という者ですが」

「わたくしは安島二郎の家内で御座います」

「あ……そうですか」

やつとわかった。安島二郎というのは当主、安島一郎子爵の弟で、現在、鎮^{ちんぜい}西電力会社の重役をしている。有名な道楽者だ。兄の炭坑王^{うち}の家に同居していると見える。

「……あの……何か御用で……」

そういう地声が、すこしシャ唖^がれているところをみると、どうやらこの夫人の素性がわかるようだ。無論、風邪を引いてるんじゃない。

「……実は……その……」

と吾輩は眼を白黒した。来るんじゃないかな……と思った。元来、何しにここへ来たんだか吾輩自身にもわからないので、いわば好奇心に駆られて来たに過ぎない。とりあえずこれから用向きを考え出さなければならぬのだが、コンナ婦人に改まられると、考えて来た用向きでも引込んでしまうのが吾々、男性の弱点である。

「只今。千代町の藤六爺^{じい}から電話がまいりましたが……生憎^{あいにく}途中で切れましたが……」
ああ助かったと吾輩は思った。チャンスチャンス……。

「……あの娘がどうか致しましたので……」

「へエ。実はその……此村……ヨリ子さんが……」

「どうしたんですか一体……」

急ぎ込んだ夫人の語気が、だんだんお里をあらわして来た。吾輩は思い切って打明けた。

「実は……その自殺未遂で……」

「エッ。自殺……」

この時の夫人の驚きような美しくかったこと……市川松 蔦しやうちようだって、こうは行くまい。細長い三日月眉まゆの下で、大きな瞳をゆつくりとパチパチさした。唇を半分開いてワナワナと震わした。白い両手を胸の上でシツカリと握り合わせてヨロヨロと背後うしろへよろめいた。たしかに西洋映画の影響だ……と思ううちに、美しい幻影は、そのまま扉ドアを開いてスウと応接間の外へ沁り出た。

……が間もなくその幻影が、黒ずくめの風采堂々たる紳士の手を引いて這入って来た。四十四五の新調モーニングの白ブラチナ金鎖だ。新聞で知っている電力重役、安島二郎氏だ。

二人は吾輩の眼の前に立並んで威厳を正した。瓦斯器修繕屋然たる吾輩を二人で、マジリマジリと見上げ見下し初めた。何だか新派悲劇じみて来たようだ。

手に持った吾輩の名刺をチラリと見た安島二郎氏はブスリと唇を動かした。

「私は安島二郎です。何か……その……此村とかいう娘が自殺したと云わるるのですか」

「そうです。あの下宿の二階でカルモチンを服^のんで、目下手当中です。まだ生死不明ですが、とりあえず、お知らせに……」

二郎氏は今一度、吾輩を見上げ見^み下^{おろ}した。新聞記者の機敏なのに驚いたらしい。

「ハハア。どうして私の家^{うち}と関係がある事が、おわかりになりましたかな」

「お迎^{むか}えの人力車が参りましたので、それに乗って参りました」

夫婦は顔を見合わせた。今度は図々しいのに驚いたらしい。

二郎氏が貴族風に肩を一つゆすり上げた。苦り切って夫人を睨^{にら}み付けた。

「だから云^いわん事^{こと}ぢやない。余計な事をするもんじやから……」

「イヤ。どうも済^くみません。その俾^くる^まを利用した僕が悪いんです」

「イイエ。貴方^{あなた}がお悪いのじや御座^ごいません。主人が悪いのです」

「コレ。余計な事を……」

「イイエ……」

夫人の眼がギリギリと釣上^ひつた。純然たる新派悲劇式の、キチンとした立姿になつて主人と吾輩を等分に見比^ひべた。鬚^{ひげ}の毛が二三本ホツレかかつてトテモ^{すこ}凄^{すご}い。

主人の二郎氏が吾輩にチラチラと眼くばせをした。早く出て行^いつてくれ……と云いたい

意味がよくわかったが、吾輩は出て行かなかった。何だかわからないがトテモ面白かった
ので……。

夫人は人形のように冷静に、唇を動かした。

「イイエ。申します。どうぞ新聞に書いて下さい。その方がいいのですから……」

見る見る血の気を喪った二郎氏は、万事休す……といった風に頭を抱えてドツカリと安
樂椅子の中へ沈み込んだ。どうやらこの夫人のヒステリーは天下無敵のシロモノらしい。

冷やかに主人の態度をかえりみた夫人は突立ったまま、両手を静かに揉み合わせた。冴
え切った微笑を含み含み天下無敵の科白を並べ初めた。

「わたくし、ちゃんと存じております。……あの此村ヨリ子と申します娘は鎮西電力のタ
イピストで、この安島の妾になつていた女で御座います。……安島の浮気はいつもの事で、
相手も数限りない事で御座いますから、わたくしは何も……申しませんでしたけれども、
主人が、あんまり見瘦らしい処へ通いますから、家柄にも拘わると思ひまして、それほど
気に入った女なら、当宅へ引取つて召使つてはどうかと勧めましたけれども、安島は、そ
んな事はない。アレは妾でも何でもない。気の毒な孤児だから、人から頼まれて世話し
ているだけだと申します。タイピストを辞めさせてまで世話する筋合いがドコに在るか存

じませんが……ホホ……それで、わたくしは決心を致しまして、あの宿の主人と相談を致しまして、ヨリ子を今朝けさから当宅たくへ引取つて、わたくしの側で召使う事に致しましたが、あまり来方きかたが遅う御座いましたので、当宅こちらの自用車を迎えに出したので御座います。これは妻として主人の名譽を大切に致しますために、取計とりはかりました事で、決して余計な事を致したおぼえは御座いません」

吾輩うやうやは恭しく夫人の前に頭を下げた。安島二郎氏はイヨイヨ椅子の中へ縮こまった。

「……多分……キット……主人がヨリ子に申し含めたので御座いましょう。ヨリ子は、それを信じて覺悟をきめたので御座いましょう。どんな事があつても安島家へ来てはいけない。奥さんに殺されるから……とか何とか……」

「……と……飛んでもない。そんな馬鹿な事を俺が云うか……そんな事……」

安島二郎氏が突然に歪ゆがんだ顔を上げた。中腰になつて両手を伸ばした。両袖のカフス・ボタンからダイヤの光りがガラガラと迸ほとばしつた。

夫人は冷然と尻目に見た。

「ヨリ子のような卑しい女が、何で自殺しましょう。貴方のお言葉を信ずればこそです。貴方に生涯を捧げる純な氣持があればこそです。……貴方は安島一家の呪いの悪魔です。」

お兄様や、お姉様がお可哀そうです」

「コレッ。コレ……余計な事を……」

「申します。安島家のために、すべてを犠牲にして申します。わたくしはドウセ芸人上りの卑しい女です。けれども貴方のような血も涙も無い人間とは違います。……どうぞ新聞に書いて下さい。そうすれば主人は破滅します。その方が安島家にとってはいいのです。

どうせ一度はここまで来る筈ですから……チット荒療治ですけど……ホホホ……」

「……イ……イケナイ。オ……俺には血もあれば……涙もあるんだ。あり過ぎるんだ……」

「オホホホホ。ハハハハハ……。血もあり涙もあり過ぎる方なら何故なぜすぐに、あのヨリ子の処へ飛んで入らつしやらないのですか。死にかけているのに……ネエ。そうでしょう。オホホ……」

二郎氏は立上つて来た。素焼のように白い、剛こわばつた顔に、絶体絶命の血走つた眼が二つ爛々と輝いている。

「……馬鹿……ソレどころじゃないんだ。安島家の名誉を守らなければ……」

「……白々しい。名誉を思う人が、どうして、あんな女に手をかけたんです。早くヨリ子の処へ行つてらつしやい……何を愚図愚図……」

夫人に突き飛ばされて、よろめきながら二郎氏はポケットから一握みの札束を出した。吾輩の鼻の先に突付けた。

「君は帰り給え。帰つてくれ給え。何でもない事だから……これを遣るから……サア……」
吾輩は後退^{あとじき}りをした。

「……僕は……乞食じゃありません」

「イヤ……わ……悪かった。この場だけはドウゾ……拝むから……」

「いけません。書いてちょうだい。すっかりスツパ抜いて頂戴……」

「承知しました。へへへ……これで血も涙もありますよ」

「……ハハア。貴様は社会主義か……」

安島二郎氏の顔付きが突然、打つて変つたように兇惡になつた。

金持のお道楽に反抗する奴は、みんな社会主義者と思つてゐるらしい口ぶりだ。

警察に命じて容赦なく引つ括^{くく}らせて、貴様の口を塞^{ふさ}いで見せるぞ……という威嚇も、その兇惡な面構^{つらがま}えの中に含んでゐるようだ。

「ナニツ……」 吾輩はいきなりグツと来てしまった。「……ナ……何を吐^ぬかしやがんだ。貴様みたいな奴が社会主義者を製造するんだ」

二郎氏は素早く右のポケットに手を入れた。その手に飛び付いて吾輩はシツカリと押えた。

「俺を殺して、暗^{やみ}から暗^{やみ}へ葬る気か。エエツ。これでも日本国民だぞ。犬猫たあ違うんだぞ……」

「……イ……犬猫以上だ。コ……国体^{そむ}に背く奴だ」

「ウツ。血迷うな。貴様の家^{うち}の……安島子爵家の定紋の附いた俵^{くるま}が、ヨリ子の下宿の前に着いているところを、写真に撮つてあるんだぞ。その方が国体に拘わるじゃないか……エエツ……」

この威嚇は、たしかに利き過ぎるくらい利いたらしい。夫婦の顔色が同時に土のように暗く変化した。同時に二郎氏のポケットの中の指がムズムズと動いた。ピストルの引金を探っている様子だ。

……ハツ……と思つたトタンに吾輩の手が反射的に動いた。安島二郎の下顎^{あご}がガチンと鳴つた。義齒^{いれば}の壊れたのがダラリと唇から流れ出した。そいつを一本背負^{しやうた}いに支那絨^{じゅうた}氈^んの上にタタキ付けると同時に、轟然とピストルが鳴つた。その弾丸^{たま}が部屋^{へや}の隅のグラインドピアノを貫いたらしく、器械の間を銕丸^{てつたん}がゴロゴロと転がり落ちる音が、何ともい

えない微妙な音階を奏^{かな}でた。

その音が消えないうちに吾輩は応接間を飛出した。

夫人はトウの昔に眼を白くして、床の上に引っくり返っていた。

社へ帰ると吾輩は、すぐに写真室に駈け込んだ。千代町の電車通りの角に行つて、ヨリ子の下宿の写真と、ヨリ子の寝顔を撮つて来いと、飲み友達の写真師に命じた。序^{ついで}に安島二郎氏夫妻の写真をカードの中から探し出して、それを見い見い記事を書いているうちに一時間ばかりして写真師が濡れた臭素紙^{しゅうそし}を二枚持つて来た。

見ると驚いた。

まだ生死不明の境に昏睡している筈の此村ヨリ子が、寢床の上に坐っている大ニコニコの愛嬌顔が堂々とあらわれている。吾輩はちよつと面喰つたが、モウ一枚の煙草店の写真の前に、古い写真の中に在る人力車の向う向きの奴を切抜いて貼り付けて、工合よく補筆した上で、俾^{くるま}の背後に安島家の定紋三階菱を小さくハッキリと描いた。その写真をモウ一度複写した奴に、ヨリ子のニコニコ顔と、安島夫妻の写真を添えて、記事と一所に山羊髯に差出した。

記事の内容は「自殺を企てた安島二郎氏の愛妾」「その自殺を知らずに本邸から迎えに来た、二郎夫人の自用車」「ソレとわかった安島子爵家の大狼狽」という意味で、見た通り、聞いた通りの事実を、普通の記事体^{てい}に一直線に書き流して、夫妻の感想談を麗々しく並べた興味百パアセントの夕刊記事であつたが、その分厚い原稿を山羊髯は夕刊の二面にデカデカと載せた。

多分臨時議会后で記事が足りなかつたんだろう。

するとコイツが恐ろしく利いたと見えて、その夕方、安島家から^{いか}厳めしい顧問弁護士が、玄洋日報社へ乗込んで来て、社長と山羊髯に面会して記事の取消を厳命したという事で、その翌る日の朝刊の一面に「事実無根……安島家云々」の二号活字の取消広告と、社会記事の末尾に小さな取消記事が五行ばかり出た。

吾輩は、それを見ると大いに不服で、早速山羊髯に抗議を申込んだが、山羊髯は平気で眼をショボショボさした。

「ヒツヒツ。安島家はのう。玄洋日報社の一番有力な後援者じゃけにのう。否^{いや}とも云えんでのう……社長どんも弱つとつたわい」

「そんならモウ一度、安島家に談判して下さい。玄洋日報社へ十万円寄附するか……どう

だと云つて……。イヤだと云えあ玄洋日報社員をピストルで撃つた事実を公表するがドウダと云つて下さい。グラント・ピアノが証人だ。失敬な……」

「まあまあ。そう腹を立てなさんな。あの取消広告はのう。誰も信じやしませんわい。……のみならず取消広告たるものは大きければ大きいだけ記事の内容を強く、裏書きする意味にもなるものじゃけにのう。ホッホッ……」

「それ位の事は知つてます。あいつは僕を社会主義だなんて吐かしやがったんです。おまけに犬か猫みたいに僕を撃殺そうとしやがったんです。あんな奴が社会主義を製造する奴なんですから徹底的にタタキ附けとかなくちや……」

「ヒツヒツ。もうアレだけ書かれりや大抵ピシャンコになっているじゃろう。おまけにイクラ広告や記事で取消しても、あの写真ばかりは取消せんけにのう。たしかにあの煙草屋の門口に安島家の俵くるまが着いとるけにのう。自殺を知らずに迎えに來たちう現げんの証拠が……」

「アハハハ。ちよつと待つて下さい。あの写真はインチキですよ。あの家の写真と、人力車の写真を僕が貼り合わせたんですよ」

「ホホオ。そんならあの紋所は……」

「あれも僕が白絵具で描いたんです」

「……………」

山羊髯が哑然となった。

吾輩は入社以来、初めて山羊髯を一パイ喰わせたので、スツカリ機嫌を直してしまった。
……これだから新聞記者は止められない……。

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年9月24日第1刷発行

※本作品中には、身体的・精神的資質、職業、地域、階層、民族などに関する不適切な表現が見られます。しかし、作品の時代背景と価値、加えて、作者の抱えた限界を讀者自身が認識することの意義を考慮し、底本のままとしました。（青空文庫）

入力：柴田卓治

校正：かとうかおり

2000年9月9日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

山羊髯編輯長

夢野久作

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>